
止めのファンデブ

中等遊民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

止めのファンデブ

【Zコード】

Z8596V

【作者名】

中等遊民

【あらすじ】

商業都市として潤う都市国家で徴税吏見習いをしているしがない若者と、その友人で、大商人の依頼で密輸品の護衛を請け負った失業中の傭兵。そんな一人の身近で起きた一件の殺人事件。事件の真相を追う一人ははからずも、領主、教会の実力者、大商人の思惑が交錯する陰謀の渦に巻き込まれてゆく。

プロローグ

フクロウの鳴き声が聞こえた。闇夜の森の中で目に見えるのは、カンテラに照らされた馬の尻と前方の泥道、そして先頭を走る荷馬車の灯りだけだった。

「お前えは今までに何人殺した?」

そんなダミ声が荷馬車の後ろから聞こえてきたのは、ちょうどデルブレー山脈の針葉樹林帯から、アグレッサ領内の広葉樹に覆われた 霧の森 に入った頃だった。

「俺は今までに八人殺つたことがある。おい若えの、鶏一匹締めたことねえようなツラしてんな?」

ダミ声がゲラゲラと笑つた。

「そ、そんなことねええよ! 俺だつて四、五人殺してたんまり稼いだことがあるぜ」

別の若い声が慌てて否定する。

荷馬車の前席で御者に並んで座つていた筋骨たくましい大男は背中越しにそんなやりとりを聞き、うんざりして頭を搔いた。男の名前はガスコン・パンタグリュエル。ついこの前まで 誇り高き戦争屋 と呼ばれていた若き傭兵であつたが、昨今の近隣の平和状態すつかり仕事にあぶれ、今ではケチな商人お抱えの用心棒をやつていた。今夜のように商人の密輸品の護衛をしたり、財宝を納めた蔵の見張りをして、わずかばかりの給金を貰い食いつなぐ毎日だ。当然、こんな仕事にはヤクザ者やクズ野郎が多く集まつてくる。そんな者達と一緒に仕事をしなければならない今の状況に、ガスコンは小さくため息をついた。

「おい、兄ちゃん。お前はどうなんだ?」

ダミ声が今度はガスコン背中を叩いた。前席で進行方向へカンテラを向けていたガスコンは面倒臭そうに振り返り小声で言った。

「さあな、忘れちまつたよ」

話はそれまでだとばかりにガスコンが前に向き直ろうとするその肩を、ダミ声がぐいと後ろへ引っ張った。

「へえ、言うじゃねえか。なら、どうやって殺つた？　この俺に話して聞かせる」

どうやら応対の仕方を間違つたらしいとガスコンは思つた。本来、周囲に注意しながら通らねばならない森の抜け道で、こんな無駄話にふけつていては、とても密輸品を狙つ盗賊の奇襲には太刀打ちできない。

ダミ声の中年の男は、黒い不潔な長髪をふりみだし、前歯の抜けた悪臭の放つ口で、ガスコンに言つた。

「その顔の傷も、糋がつて自分でつけたわけじゃねえよな？」

男はグラグラ笑い出す。ガスコンの左頬から鼻にかけては、まるで地割れのような傷跡が走つていた。以前戦争に従軍した際に敵の騎士によつて斬られた傷だつた。向う傷ということもあり傭兵にとつては勲章のようなものだ。本来、場所が場所ならこんな侮辱を言つ者は只では済まさないとこゝだが、今は喧嘩ができるような状況ではないので、ガスコンは首を振つた。

「ちげーよ。ほつといてくれ……」

ガスコンは再び前を向き、カントテラの光を進行方向へ向けた。森は深くなつてゆき、道は泥もしくは荒い砂利に覆われた地帯にさしかかる。本来、街道を通つて西の山地からアグレッサの街に入るには、山のふもとにあるノックス砦を通過しなければならないのだが、砦を通過し石置で舗装された街道を通るには、馬車や積荷にかかる多額の税を領主に支払う必要があつた。特にアグレッサは、内陸部の諸都市と港湾都市ポート・フォリオを結ぶ街道の中継点に位置しそこを通過する多くの人や物にかけられた多額の通行料と関税によつて潤つていた。

当然、商人たちのなかには、領主による課税を免れようと考える者も多く、知られていない抜け道や獸道を使って交易を試みる者もいる。ただ、人目につかない深い森や山道には、その交易品を狙つ

て盗賊たちがはびこり、道中は極めて危険だった。その為に、商人たちはガスコンのような用心棒を密輸品の護衛に雇っていた。

今回の彼らの雇い主はアグレッサの経済を手中に収めているのはギルドと呼ばれる商業組合だった。それも、様々な業種のギルドの中でも、アグレッサ領内で物資の運搬の中核を担う、馬車や荷車業を掌握しているギルドだった。これら運送業を支配する大商人達は荷車ギルドもしくは物流ギルドと呼ばれていた。

今回の仕事はアグレッサの物流ギルドからの依頼だった。やたらと重い大小の木箱計四十箱余りを五両の荷馬車に分けて載せ、アグレッサの西にあるデルブレー山脈を越えた商業自由都市アーロンからアグレッサの街まで、森の抜け道を通り護衛するのが今回の仕事だった。

霞の森に入つてしまはらくして、その名のとおり、あたりは徐々に霧がたちこめてきた。涼しいが湿度が高いこの森は、霧がでることが多かつた。ガスコンは舌打ちした。さつきまではつきり見えた先頭の荷馬車のカンテラの灯りが、ぼんやりとしてオレンジ色の鬼火のように見える。ガスコンと御者は後ろの馬車へ振り返る。背後には三両の荷馬車の灯りが、同じくぼんやりと見えた。

「嫌な陽気だな。もっと速くとばせないのか？」

御者は首を振った。

「ここからは道が悪い。下手にとばすと、馬車がひっくり返るからな」
御者の言つとおり石ころ道に入り、先程から馬車自体がガタガタ振動している。

俺が盗賊ならここで待ち伏せする……頼むから何も起こるんじゃないぞ

ガスコンはそう思いながら、腰の剣帯に繋いだカットラスの柄に手を置いた。

後ろでは先のダミ声がしきりに、犯罪じみたこれまでの『武勲』を自慢し始めた。ガスコンにはこの男の剣の腕など知る由もなかつたが、大抵こういうタイプのヤクザ者で本当に剣の腕がいい者は少

ない。恐らくもう一人の若者のほうも見たところ、修羅場の経験したことなど無さそうだった。

この荷馬車にはもう一人、護衛に雇われた無口な男がいた。こういう仕事には慣れている様子で、その落ち着いた様子や使い込まれた腰のブロードソードを見るに、はじめは頼りになりそうだと思えたが、ガスコンは期待したのだが、結局はこの男も頼りにできないと思うようになつた。というのも、その男からは絶えず酒の臭いがしていたのだ……。

荒れた道が緩やかな左カーブに差し掛かった時だった。霧の中で前方の荷馬車の灯りが大きく揺れた。そして、悲鳴と共に前の馬車から誰かが転げ落ちた。何か異変が起きたのは明らかだつた。次に、ガスコンの耳は近くで風切り音が鳴るのを捉えた。聞き覚えのある音だ。ガスコンはすぐに身を低くして怒鳴つた。

「襲撃だ！ 気をつけろ！」

そう言い終わらないうちに、右隣に座つていた御者の肩を矢が貫いていた。馬車から落ちそうになつた御者を座席にひっぱりあげて馬の手綱を御者のベルトに縛つた。

「おい、しつかりしる。手綱から手を離すなよ！ 絶対に止まるな」

「敵襲！ 敵襲！」

前後の馬車からも叫び声があがる。前の馬車も後ろの馬車も弓矢による攻撃を受けていた。馬車の左側の車体に矢が一本、音を立てて突き刺さつた。攻撃は左手の森の中からだつた。前後の馬車の用心棒達は一斉に剣やダガーを抜いて馬車から飛び降りたが、どこからともなく射掛けられる矢によって次々と串刺しになつて倒れてゆく。先程、四、五人殺した事があると話していた若者は、怯えたような奇声を上げながら腰に差したショートソードを抜いた。

「おい、よせ！」

ガスコンの制止の声も聞かず、馬車から飛び降りようとした若者は、あっけなく胸のど真ん中に矢を受けて積荷の木箱の上へと倒れ伏し、ぴくりとも動かなくなつた。

「慌てるな！ 敵の場所を確かめる」

ガスコンは足元に置いてあつた数本の松明を掴み、カンテラの中に突っ込んで火を灯すと、次々と森へ放り投げた。暗黒の森にオレンジ色の視野がぼんやりと広がる。弓矢の攻撃が弱まり、叫び声とともに木陰から大勢の者がこちらへ突進してくるのが見えた。抜刀した敵の刃が松明のオレンジの炎を反射して光っていた。

ガスコンは荷馬車から飛び降り、真鎗でできた柄を握り、飾り気のない黒い鞘に納められた細身のカツトラスを抜くと、敵へと走り出した。同じ馬車にいたダミ声と無口な男もそれぞれの得物を抜いて敵を迎撃つた。薄闇の中、たちまち金属同士がぶつかる音ともに混乱した白兵戦がはじまつた。

襲撃者は全員、黒い頭巾に黒いクローケを身に着けていた。向かってきた一人がガスコンへ細身のブロードソードを振りおろす。その一撃目をカツトラスで弾き、すぐに左手で腰の短剣を抜いた。刀身に櫛のような切れ込みの入った、肉厚で頑丈な装飾のない短剣・ソードブレイカーである。敵が横ざまに振りぬく剣をソードブレイカーで受けると、目の前で大きな火花が散った。ソードブレイカーで敵の刃を封じたまま、ガスコンは大きく踏み込んで敵の胴を上から下へカツトラスで切りつけた。敵の男は悲鳴をあげて仰向けに倒れる。踏み込みが足らず決定打ではなかつたので、ガスコンは止めを刺すべくカツトラスを構えるが、視界の左隅に刃の反射を捉え、闇雲に左手のソードブレイカーを振つた。

剣に強い衝撃がぶつかる手ごたえと共に、鋭いレイピアの剣先が自分の短剣とぶつかつていた。左拳に鋭い痛みが走る。レイピアの剣先が一度ひつこむと、すぐに次の素早い刺突を繰り出されてきた。ガスコンは間合いを広くとり、敵の突きをかわしながら相手を見た。黒い頭巾で顔を覆い、黒いクローケを羽織つた非常に小柄な男だった。右手には金の柄と護拳がついたスウェプトヒルト・レイピアを持ち、左手には刀身が異様に細い刺突用マンゴーシュを防御用短剣として構えている。まるで左手の短剣で弓を引くような姿勢で半身

をこちらに向け、両の剣先を前へと突き出した。

チビのくせに腕が立つな……

ガスコンはソードブレイカーを前へ突き出し、カットラスを背負つよう構えて相手を牽制するが、すぐに横から新手の敵に斬りかかられ両手の剣でその刃を受ける。そのまま敵の腹へひざ蹴りを見舞つて、怯んだ隙にカットラスで敵の胸を突き刺す。敵は悲鳴を上げて倒れるが、止めの一撃を加える前にまたもレイピアの小男に側面から襲われた。

多勢に無勢の上に、敵は集団戦に持ち込んできた。このままでは明らかに負けると考え、ガスコンは間合いをとり、敵へ打ち込む振りして脱兎の如く逃げ出した。馬車の近くまで後退すると、そこでは先の無口な男が敵三人を相手に斬り結んでいた。ガスコンはそのうちの一人を背中から一刀両断して、首筋と胸を何回も突き刺して止めを刺し、二人目の敵の左胸を払う。残りもう一人は負傷した仲間を抱え、森の闇へと逃れた。

「す、すまんね…… 敵も山賊にしては腕が立つ……」

男は酔っ払っているのか、ふらふらと足元がおぼつかない様子でよろけながら、礼の言葉を述べた。

「馬車が止まつちまつた。ここは頼むぞ」

「お、おう……」

ガスコンは荷馬車の御者へ下から声をかけた。

「おい、止まるな！ 急いで逃げる」

さつき矢を受けた御者は血まみれになりながら手綱を握り、道を塞いでいる先頭の馬車を指さした。

「前の馬車が…… 御者が、やられた」

苦痛をこらえた表情で御者は言つ。先頭の馬車を見ると、松明のかすかな灯りのなかで、数本の矢を受けた御者が馬車の下に転がっていた。

ガスコンは周囲を見回した。ダミ声の男は、転がった松明の近くで敵四人を相手にし、まるで狂人のように両手の短剣を振り回して

いる。斬りかかつた一人の腹を短剣で突き刺し、助けに入った隣の敵の腕を切つて深手を負わせたが、残り二人に斬りつけられて木の根元に倒れるのが見えた。無口な酔っ払い男が加勢せんとばかりにそこへ走つていつた。

「このままじや皆殺しだ。俺が前の馬車を動かす。一気に突つ走るぞ」

ガスコンはそう言つて細い道を塞いでいる先頭の荷馬車へと走り出した。一両目の馬車の護衛達は全滅し、敵の一人が荷馬車の手綱を手にしたところへ、背後からガスコンが襲い掛かつた。ガスコンは一人を馬車から蹴り落とし、手綱を握つていたもう一人の頭をカツトラスで叩き割ると、馬の手綱を取つた。馬車馬の扱いなど判らなかつたが、とにかく馬の尻を何度も手綱ではたくと馬はゆっくり歩き出し、しだいに走り始めた。すると森からホイッスルの音が聞こえ、それまで斬り合いを繰り広げていた黒衣の襲撃者達は、負傷した仲間を連れて森の方へと退却をはじめた。

た、助かつたか？

ガスコン達はその隙に負傷した仲間達を荷馬車に担ぎ上げると、なんとか安全な場所まで馬車を走らせ、危機を脱する事ができた。

アグレッサの徵税吏

雨は早朝からアグレッサの目抜き通りに敷かれた石畳を叩いていた。ウェルテ・スタックハーストの羽織る深緑色に染めた羊毛フェルトのクローケには雨水が染み込み、どんどん冷たく重くなつていく。今日は珍しく、モービル街道と呼ばれる街中心部の目抜き通りでも、人や馬車の往来はまばらだつた。ウェルテは止め処なく落ちてくる鼻水をよれよれのハンカチーフで何度も拭いながら、領主館の西にある徵税役場まで歩き出した。

広いモービル通りに面する徵税役場は「シック造りの四階建ての建物で、多くの市民や近隣の農民が納税や負担に関する相談のために列を作っていた。特に農村部では生産物を貨幣に替える手段がないため、なんとか租税を物納で済まそうとする多くの農民が鶏や豚を連れてやつてくる。その処理のため、役場の一階の受け付け場は毎日大混乱だつた。

そんな納税者達の列をかきわけてウェルテは建物へと入り、奥の職員の詰める広間へとやつてきた。オイルランプの灯る薄暗い広間に入り、びしょ濡れのクローケと白い羽毛飾りのついたフェルト製の黒いキャバリアー・ハットを帽仕掛けに掛け、ウェルテは寒さで身震いしながら空いている椅子に腰をあおした。不意に大きなくしゃみとともに、鼻水が飛び出す。周囲の者がギョッとした表情での小柄な若い男の方を見た。風邪引きはどこでも嫌われる。なぜなら、命にかかる流感と区別がつかないからだ。

「だ、大丈夫だ。只の風邪……」

慌てて鼻水を拭つて弁解するが、皆眉間に皺を寄せて首を振つた。

鼻水をすすりながら、ウェルテは今日の集金の訪問先を記した羊皮紙をなめし革の物入れから取り出した。今日は、歩いて片道二時間半かかる莊園の粉挽き場まで税の取立てに行かねばならなかつた。

「いよう、ウェルテ。さてはその鼻水、もしや流感か?」

「だから風邪だつて……」

後ろから声を掛けてきたのは、同じ徵稅吏見習いの同僚であるサリエリだつた。太つた丸顔にボサボサの頭、愛嬌のある細い目に笑みを湛えて、サリエリはウェルテの隣にドサリと座つた。

「ただ、頭はガンガンだし、とても寒いんだ」

「今日はどこをまわるんだ?」

憂鬱な顔でウェルテは羊皮紙のリストを見せる。

「霞の森の方か……お前は口バを持つていないしなあ……実は俺も今日、森の方へ行かなきやならないんだ。ついでに行つて来てやろうか?」

「え、いいのか?」

ウェルテは驚いた。

「その代わり、治つたらぶどう酒を奢れよ。それにな、実は会いたい村娘がいるんだよ」

にやけて言うサリエリの言葉にウェルテは露骨に嫌な顔をした。

「やつぱり、そんなことだらうと思った……」

サリエリはお世辞にも美男という風貌ではなかつたが、人懐こい無邪気な性格のため男女問わず人気があり、特に農村部の娘達によくモテた。それはサリエリから税を取り立てられる側である農民も例外ではなく、行く先々の村で彼は歓迎された。なぜなら、彼は農民達の為に日々仕事をサボることがあり、税にからむ問題では極力相手に無理が無いよう便宜をはかつてやることが多かつた。領主による重税に苦しむこの領内では、とても大切なことだった。

「とにかく、今日はゆっくり寝て早く風邪を治せ。ぶどう酒が楽しみにしどくぞ~」

そう言つてサリエリは羊皮紙を懐のポケットへしまつと、鼻歌を歌いながら、クローケと帽子を手に部屋を後にした。

今日の仕事が無くなつたので、ウェルテは周囲の同僚達に声を掛け、クローケを羽織つて外へと出た。

ウェルテは極力冷たい雨に当らないよう小走りで、モービル街道

と呼ばれる大通りを南へ下る。アグレッサ城から南へしばらく歩くと左手に大きな鐘楼を持つた教会が見えてくる。教会の左手には大きな石畳の広場があり週に一度、大市が立つ場所だ。ウェルテは広場を突つ切つて東へと向かう路地へと入つた。この辺は都市の一般市民が住む居住区が多い。路地は石畳で舗装されていない為、ぬかるみと水溜りだらけだつた。ウェルテは水溜りをよけながらしばらく進み、三階建ての白壁の半レンガ、半木造の建物の前で足を止めた。屋根から伸びた煙突からはうつすらと煙が昇つてゐる。ジヨックと羊をあしらつた鉄製のレリーフがかかる木のドアを押すと、室内の暖かさと来客を知らせるベルの音がウェルテを迎えた。

「おやウェルテ、いらっしゃい」

バークウンターの向うから大柄な茶色い髪の若い女、ロクサー・ヌガウェルテに挨拶した。相変わらずいつ見ても魅力的な女性だとウェルテは思った。はつきりした目鼻立ちや茶色のカールした長い髪、そして痩せすぎない豊満すぎない魅力的な体型は、多くの男達の人気を集めている。

「やあ、おはよう。食事に来たんだ」

今朝のカウンターには先客が居た。色白で小柄なウェルテとは対照的に、大柄で日焼けした肌は荒々しさを感じさせ銀色の髪を短く刈り込んだ男、ウェルテの剣術修行時代からの旧友であり、この居酒屋兼宿屋の女主人が誰よりも愛する傭兵のガスコン・パンタグリュエルが、椅子の上で自分の足に包帯を巻いていた。

「なんだ、戻つてたんだ。久しぶりだな」

ウェルテがひどい鼻詰まりの声で尋ねたので、ガスコンとロクサー・ヌは顔を見合せた。

「もしかして流感……」

「いや、ただの風邪だから……」

ウェルテはそう言って帽子とクローケをとり、帯剣ベルトから銀の柄のレイピアを抜いて壁に立てかけた。

「温かいものをくれる?」

「今、芋のスープを温めるから待つてて」

ロクサーヌはそう言つてカウンターの奥にある厨房へと下がつた。

ウェルテはカウンターの椅子に腰掛けた。

「用心棒の仕事はどう? 今回も無事に済んだみたいだな」

「冗談じやないとガスコンは首を振つた。

「確かに大きなケガはしなくて済んだが、二十人いた護衛のうち七人が死んで、四人が瀕死だ。こんな酷い仕事は初めてだぜ」ガスコンは、今朝依頼主の蔵まで無事に密輸品を運び込んだ事、そして瀕死の重傷者達を床屋（大昔、床屋は医者を兼務していた）へ担ぎ込んだ事などをウェルテに話して聞かせた。

「だから、抜け荷の護衛はヤバイからよせつて言つたんだ。それにしても、盗賊も怖いなあ。大損害じやないか」

ウェルテは鼻をすすりながら感心したように言つた。

「のん気な事言いやがつて。こつちは危うく死にかけたんだぞ。だけな……」

「ん?」

ガスコンは木製のコップに注がれたエールを一飲みした。

「なんとなくなんだが、襲つてきた奴等、盗賊らしくねえんだよ……」

「……」

「らしくないって、何が?」

「山賊どもの持ついい加減さつーか…… うまく言えねえけど、武器にしても剣さばきにしても、妙に落ち着いていやがる。戦場で正规の騎士や兵隊とやり合つた時みたいだ」

ウェルテはハンカチで鼻を拭いながら返す。

「でも今更、盗賊に身を落とす騎士や兵隊なんて珍しくないだろ」

ガスコンは左手の甲にできた裂傷にすり潰した薬草を当てながら首を振つた。

「そなんだけよ…… やつらは皆、正規の剣術訓練を受けた野郎ばかりだつたんだ。この傷だつてやたら剣筋の素早い小僧にレイピアでやられた」

「レイピアか……」

「それは確かに珍しい」

レイピアは多くの一般市民が腰に差した護身用の細い剣だ。いざ実戦をという場では兵士の予備の武器として位置付けられ、攻撃用武器の主力として用いられることは少なかつた。盗賊のようにはじめから戦いを想定するのであれば、歩兵用の両刃剣であるショートソードやブロードソード、もしくは船乗りや海兵が好んで使う片刃のカットラスといった、より丈夫な種類の剣を使うほうが自然だつた。厨房からロクサー・ヌがジャガイモを煮込んだスープと硬い黒パンを持ってきた。ウェルテは木のスプーンで、湯気の立つ白いごろごろのスープをすくい、口に含む。塩味ともつさりとした芋の甘味が口内に広がつた。

「きっと僕らみたいな奴が山賊になつたんだよ」

硬く乾燥した黒パンをちぎりながら、ウェルテはそう言つて自分達の剣術修行時代を思い出していた。

ウェルテは、アグレッサの北東に位置する商業都市プラムベリーの出身だつた。街で公証人を勤める父親のもとに生まれたウェルテは、平凡な中流都市市民として育つてきた。そんな彼が一つ年上の孤児であるガスコン・パンタグリュエルと出会つたのは十三才の時だつた。

当時、プラムベリー領主は自分の子女や配下の騎士達の為に、高名な武芸者であり戦術研究家でもあつたレスター・ヴァンペルトを武術の指導顧問として招聘した。極めて優秀な剣士であつたが非常に変わり者でもあつたヴァンペルトは、騎士達の訓練の合間にみては市内に繰り出し、街の子供達相手に棒切れでチャンバラごつこの相手をしてやつたり、身を守るための剣術の手ほどきをしたりして過ごしていた。ウェルテもヴァンペルトに遊び相手になつてもらつた子供の一人だつた。元々ウェルテは昔の騎士道物語に憧れ、古い英雄譚の読み物ばかりを読んでいたので、棒きれを手に、ヴァンペルトにくつついて歩き、あれこれ質問ばかりしていた。

ウェルテが十三才の時、ヴァンペルトはウェルテをプラムベリー

城内にある広場へと連れて行つた。そこには一人の同年代の少年がいた。一人はブロンドの髪を伸ばし、真っ白なカラーシャツに優美な半ズボンと高価なタイツを履いた、見るからに貴族然とした美少年で、急に現れたウェルテを踏みするような目で見つめていた。もうひとりは銀色に近い短髪のたくましい少年で、荒く織つた、ほころびだらけのチュニックを着ていた。どうみても城で剣術の稽古が受けられる身分には見えないその少年は、貴族でも農民でもなさそうなウェルテにどう接しようか悩んでいるような顔で見つめていた。これが、ウェルテとガスコンの初めての出会いだつた。

「暇な時間に息子に剣術の稽古をつけてくれと、とある貴族に頼まれたんだがな。相手が子供一人だと、どうもやりにくくてかなわん。そういうわけで三人まとめてやることにした。各自に最も必要な稽古をつけてやる」

このことについて貴族の少年はなんだかんだと文句を言つていたが、ヴァンペルトは笑いながら自分のあご鬚をなでてその声を受け流している姿を、ウェルテは昨日の事のように思い出した。

「ヴァン先生は、今どうしているかなあ……」

ウェルテはスープを飲み干すとつぶやいた。

「先生の事だ。どーせまた子供相手にチャンバラじつこでもしてんじゃねーかな。ひょつとしたら、北部の異端者達に稽古でもつけるかもな」

ガスコンはカツトラスを鞘から抜き、血で汚れた刀身をボロ布で磨きながら言った。北部では宗教を巡る紛争が激化し、宗教的異端者に対する恐ろしい弾圧が行われているという噂話がアグレッサにまで届いていた。

「あたしも信心深いほうじゃないけどさあ、教会もえげつないことすると思うわ」

そう言つて口クサーヌがウェルテに温かい茶を渡した。

「おい！ 気をつけねーと、もし祭司にでも聞かれたらヤバイぞ」あわててガスコンがたしなめるが、口クサーヌは関係ないとばかり

に首をふった。

「何言つてんの。教会のお偉いさんがこんなところに来るわけないよ。それにしても最近の救済税、ちょっと上がりぎだとは思わない、ねえウェルテ」

教会へ納める救済税はそれぞれの領主を通して宗教都市グライトの教主へと納められる。その領主の元で直接、税を取り立てるのはウエルテのような徵税吏だつた。ウェルテも困惑顔でお茶をする。

「こつちも困つてんだよ。今年は麦も不作で価格も倍増、それなのに教会に納める救済税も倍増。今年はちょっとまずいよ。役場も取り立てに手加減してるけど、領主に對して取立て額を誤魔化すのはもう無理みたいだ。下手するとこの冬は餓死者が出るかもしない」
徵税役場も、今まま重税が續けば大量餓死と疫病もしくは農民一揆が起こることは判つてるので、あの手この手で領主へ納める額を誤魔化してきていたが、領主による締め付けは一層厳しくなり、役場の努力にも限界が訪れていた。

「そういうえば、今回の抜け荷の依頼主は一体誰だつたんだ？　そいつも税金払いとくなかったんだね」

「ああ、もちろん知らされちゃいないが、荷主は間違いなくオストリツチ商会だ。盗み見た引渡し証文に、足のひよろ長い怪鳥の紋が描かれてた」

「オストリツチって……荷車ギルドの組合長じゃないか！」

アグレツサ領内で何か物の運搬を行う場合には、必ず領内の物流を支配しているアグレツサ荷車ギルドに加盟している運搬業者に依頼しなければならなかつた。そのなかでも最大の資本とショアを誇つてゐるのがオストリツチ商会だつた。オストリツチ商会はギルドの組合長を務める豪商で、アグレツサの経済を半ば支配しているとも言われていた。その街一番の豪商が脱税の為に密輸をしていたといつのだ。

「くれぐれも俺から聞いたなんて言つなよ。俺の仕事も信用が第一なんだ」

「ハハハハ、心配いらぬよ。僕みたいな下っ端に、あんな大物商人を告発するなんて無理だね」

心配するガスコンをウェルテは笑う。徵税役場で仕事をしているウェルテとしては、悪徳商人に対し本来なら怒りを感じるべきなのが、この時代、欲深い商人達の間ではそんな事は当たり前なので、苦笑いすることしかできなかつた。

「ガスコン、一層二人で山賊でもはじめようか？」

スープとパンを食べ終えたウェルテは、ふざけて言つた。

「剣の腕はともかく、威圧感の無いお前の体格じゃ山賊は無理だろ。それに、見栄張つてまだそんな踵の高いブーツ履いてるのか？」

ガスコンは呆れながら、横からウェルテの底上げしたブーツの踵を軽く蹴つた。カウンターの奥で皿拭いていたロクサーヌが思わず吹き出す。ウェルテが睨むと、ロクサーヌは口元をおさえながら慌てて厨房へと逃げていつた。

「ところで次の仕事は決まつているのか？ いつまでここにいる？」

ガスコンは首を振つた。

「契約は今回で終わり。また仕事見つけねーと…… 今回だつて命懸けの仕事で、たつた五十シルバの稼ぎだ」

ガスコンはそう言って皮袋からわずかばかりの銀貨を出して見せた。
「そうか…… じゃあ僕はそろそろ帰つて休むよ。もし遠くへ旅立つなら、その前に一声かけてくれ」

ウェルテはそう言つと、腰のベルトに吊るした皮袋から銅貨を数枚出してカウンターに置いた。

「ロクサーヌ、『馳走様』

「ああ、もう帰るのかい？ お大事にね」

厨房からロクサーヌが手を振つた。

ウェルテはクローケと帽子を身に着け、ロクサーヌの酒宿を出た。雨はまだ止む気配がない。ぬかるんだ泥道からモービル街道へと出ようとするとき、辻の右側から真紅のマントを羽織つたプレートメイル姿の騎士達に先導されて、黒塗りの高級四輪馬車が水を跳ね上

げながら通り過ぎ、領主館の方へと走り去った。ウェルテは馬車が撒き散らした泥と水しぶきをクローケで防ぎながらその過ぎ去る馬車を見送った。

ウェルテは悪態をつきながらも、せっかく食事で温まつた体が冷えてしまつ前に寝床へついため、自分の下宿へと足を急いだ。

神のものと剣のもの

ウエルテの眼前を通り過ぎた黒塗りの馬車は街の中心部にある領主館 アグレッサ城 の城門を越えて、芝の生い茂った大きな館のエントランスに止まつた。すぐに館の使用人達が整列し、馬車のドアを開ける。馬車の中から、フォルス教の赤いゆつたりした法衣に身を包んだ、姿勢の悪い色白の小男がサイドステップに降り立つ。館から、鮮やかな金糸に彩られた上着に半ズボンとタイツを着た、背の高いがつしりした中年の男が歩み出て、笑みを浮かべて恭しく頭を下げ笑みを浮かべた。

出向えを受けた法衣の男、宗教的権威をもつてこの大陸を支配するフォルス教会の幹部聖職者であるドミニーク・ホルヘ祭務官は両手で印を結んでその場にいた者らを祝福した。

「ようこそ祭務官様、遠路はるばるこのアグレッサまで、よくおいでくださいました」

出迎えた男、アグレッサ公フランツ・ド・ゾロッソは祭務官の手を引き館の中へと促した。

アグレッサの領主であるフランツ・ド・ゾロッソの居館であるアグレッサ城の応接室は、館の一階南東の角にある。壁は漆喰と化粧板におおわれ、天井からは高価なシャンデリアが吊るされた、開放感と清潔感のある部屋だった。室内には安楽椅子や高価な諸外国の調度品が並び、アグレッサの豊かさを誇示している。

白い漆喰の塗られた壁には、大きな布製の地図が掛かっていた。アグレッサを中心に、この大陸の東側を描いた物で、周囲に多くの都市国家諸国の場所と地名、それに街道が記されている。地図の右端、すなわち日の昇る東側は大洋を示す青で塗られている。海と陸地の境界にひときわ大きく名前が書いてある街が大港湾都市であるポート・フォリオである。ポート・フォリオから西の内陸平野部へは大きな街道が一本伸びている。その道はいくつかの関所を越えて

アグレッサに繋がっている。さらに道はアグレッサから南北と西へ伸びている。内陸の国や街がポート・フォリオへアクセスするには必ず、アグレッサを経由することになっていた。

一方、アグレッサから南へ伸びた街道は幾つかの関や砦、都市国家を経由してフォルス教の教主が住まう宗教都市グライトへと繋がっていた。反対に、北方に伸びた街道は幾つかの都市国家を経由して枝分かれし、北部の大穀倉地帯を納める街や村へと伸びていた。

アグレッサ公フランツは、グライトの街から訪れた教会の実力者であるホルヘ祭務官をこの応接室へと招いた。二人は向かい合わせに安楽椅子に座ると、給仕係の者がすぐにガラス製の高価なグラスとデキヤンターに入つたぶどう酒をもつてきた。酒が注がれ、もてなしの軽食がサイドテーブルに置かれる、館の主は召使い達に退室を命じた。

「ぶどう酒を一飲みし、ホルヘは安楽椅子へとふんぞり返った。

「フランツ、教主様は汝の毎年変わらぬ救済税の納付に大変感銘を受け、喜んでおられる。近頃の領主どもときたら、飢餓だ干ばつだと言い訳を並べ、聖なる救済の為の出資を渋つておる。呆れ果てて二の句もつげん」

フランツは狡猾な笑みを浮かべてうなずいた。

「御意。まったく神を恐れぬ所業、この私めには理解できかねます」猫背の祭務官は椅子に深く腰掛け、横柄に足を組むと、グラスに満たされた高価なぶどう酒をグビグビと飲み干した。

「特に、教主様はまだこの大地で異端者や異教徒が、我々同様に息をして日々を過ごしている事に、大層お心を痛めておられる。近々、再度の異端討伐のための宗教令を發布されるお心積もりだが……そのためには諸国領主しいては信徒全員の一層の助力が不可欠だ。判るな？」フランツ

「はい、私も同じ考え方で御座います」

フランツは祭務官の杯にぶどう酒を注ぎたしながら同意した。

「さらに教主様は、信徒達の死後の魂の救済をより確かなものとす

る為、グライトの大聖堂の拡張工事をお考えだ」

「なんと素晴らしい。建設開始の暁にはアグレッサからも選りすぐりの大工達を派遣致します」

フォルス教の教典には本来、大聖堂の規模と魂の救済に因果関係があると記した箇所は存在しなかつた。これまでに、この事実を一部聖職者や神学生が公の場で指摘してきたが、彼等は全て、教主より異端者の宣告を受け、火刑台の灰と消えていった。

「ところで、祭務官様…… 異端者の討伐にあたり、例の件に関して、教主様はいかがお考えでしようか？」

フランスは声のトーンを落として、囁くように尋ねた。祭務官はワインを満たしたグラスを揺らしながら壁に掛けられた大きな地図へと目をやる。

「判つておる…… 教主様は、善きに計らえと仰せだ。事が万事済んだ後、教主様は汝の行動を正当と宣言され、追認なさるそうだ」祭務官はそう言つて、地図の上部に位置するある都市国家の地名を見つめた。それは広い穀倉地帯と北部の山地を領土として有する都市国家で、良質な小麦の産地として有名なグレーブスの街だつた。

「グレーブス公め…… 凶作の為どうそぶき、今年は救済税を教会規定の半分しかグライトへ送つてよこさなかつた。それだけでも許されないといふに、あの領主は北部に逃れた異端どもを討伐するよう命令を下しても、従うどころか異端者に居住権を与える保護しているというではないか。この事には教主様も大層お怒りだ」

酒のせいか、ホルへはだいぶ饒舌になつてきた。

「フランス、準備の方はどうなつておる？ もしも失敗すればお前だけではなく、この私まで窮地に立たされる事になる」

アグレッサ公は男爵ひげをひきつらせて、笑つた。

「ご心配には及びません。手筈は整つております。グレーブスは間もなく収穫の時期を迎え、祭りの準備が始まっています。我々はある旅芸人一座を雇いました。我が精銳の兵士や騎士達をその芸人一座に紛れ込ませてグレーブスの街中へ送り込みます。祭りの間

は、市民だけではなく警備の騎士達も浮かれ騒ぎ、防備は手薄になります。その隙に我が兵士達が城門や市門を押さえ、街の付近に潜ませていた本隊を城内に引き入れてグレーブス公を倒す計画です。その後、私が直々にグレーブスへ赴き、神の名においての天誅をなした事を宣言いたします」

フランスの説明に、祭務官はうなずいた。

「あの街の軍は決して強力ではないが、グレーブスは非常に豊かな街だ。それに騎士達の結束は固いと聞く。油断してかかるでないぞ」「ご心配には及びません。商人にアーロンの街から最新の武器を取り寄せさせました。準備は最終段階に入っています」

フランスは地図を指さしながら言つた。

「グレーブスを攻略した暁にはホルヘ様を通して、教会へ今の三倍の救済税をお納め致します。さすれば教会の次期祭務長の座もホルヘ様の手に……」

フランスの言葉を祭務官は咳をして打ち消した。

「フランス、声が大きいぞ」

「これは失礼を致しました」

その時、オーラでできたドアが「コツコツ」と音を立てた。フランスが入室を命じると、背の高い痩せた男、アグレツサ城で領内の事務・管理を一手に担う家令のジョバンニ・ペレスが入ってきた。

「旦那様、ガイヤール騎士隊長が至急ご報告したい事があると、参つております」

「わかった、すぐ行く。祭務官様に新しいぶどう酒をお持ちしろ」

フランスは家令にそう命じて席を立つた。

友の死

暑くて目が覚めた。寝間着は汗でびしょ濡れだつた。ウェルテは寝台から身を起こし、板張りの床に足をついた。窓にはめた鎧戸の隙間からかすかな光がもれていた。まだ夜にはなつていないようだ。立ち上ると、体は軽く、頭痛も感じない。鼻水だけは相変わらず落ちてくる。風邪はほぼ回復したようだつた。寝間着を脱ぎ捨て、洗濯し虫がつかないように煙でいぶした白い木綿シャツとズボン、厚手の毛織物の上着を着て、その上から剣帯を腰に巻く。衣装箱に立てかけたレイピアと十字型のマンゴーシュを剣帯に差した。街中では、護身の為にレイピアやスマーリソード、短剣など、最低限の武器の携帯は認められていた。

ウェルテはキャバリアー・ハットを手にすると、汗で濡れた寝間着を抱えて階下へと降りた。一階の厨房では大家のおばさんが夕食の準備にとりかかっていた。

「もう動いて大丈夫なのかい？」

「お蔭さまで。洗濯物置いときます」

そう言つてウェルテは洗濯用の樽に寝間着を放り込み、外へと出た。雨はもう止んでいた。泥と水溜りだらけの細い路地を縫つて、大通りへと向かつた。石畳の街道は、東西南北から集まつた荷馬車の列や行商人の往来で一杯だ。広場では小売専門の商人達によつて仮設の市が開かれ、東西南北の文物と人々でごつたがえしていた。

人波をかきわけ、ウェルテは今朝訪れた徵税役場の前へと再びやつてきた。朝にも増して、役場の前には多くの農民や職工達が詰め掛けている。応対するカウンターは戦場さながらだ。

「お役人様、お役人様、今年の小麦はみんなイナゴにやられちました。替わりにオート麦と子豚一匹でなんとか手え打つてくださいんでしょうか？」

「うわあああ、判つたから、と、とにかく子豚をカウンターにのせ

ないで！」

一方、その隣では。

「俺の織つたこの上物タペストリーじゃあ足りねえなんて、あんた。さては、金勘定はできても品物には目が利かねえな？」

「なら、これを裏の両替商か質屋に持つていけば金に替えてくれますよ。どうします？ これ、ギルドを通しては売つてはいけないキズモノでしょ？ 連中がここに査定以上で買い取るとは思えませんがね」

役場の職員と納税者達の攻防が行われている横を通り抜け、ウェルテは広間へと入つていった。

広間では同僚達が、現金や物納された穀物や毛織物の仕分けや徵税目録の乗つた貢租簿を整理に追われていた。ウェルテは自分の代わりに出掛けていったサリエリを探したが、広間には見当たらなかつた。ウェルテは近くで銀貨の枚数を数えている同僚にたずねた。

「あの、サリエリは見ませんでしたか？」

「いいや、朝から見てないな」

ウェルテは首を傾げた。日没までもうそんなに時間がない。それに、サリエリは自前の口バを持つていて筈なので、ウェルテよりもずっと速く移動できるはずだ。ウェルテは、サリエリが村娘と遊んでくると話していたことを思い出したが、それを差し引いても遅すぎた。ウェルテは、部屋の奥で計算尺を手に指示をとばしている老人のもとへ行つた。

「反物は今日中に商人の所で貨幣に換えてくるように。交換手数料は七分までだぞ。それ以上は絶対に払つてはいかん。次！ なにに、ヒヨコが七羽生まれたのか？ たしか、この農家は滞納分も含めて五割徴収だ。三匹と半分のヒヨコを受け取るよつに、次！」

「先生、は、半分つて……」

白髪交じりの髪を辯髪にして黒いリボンで結び、眉間に鼻眼鏡をのせた、痩せた老人は、驚異的な事務処理能力で部下達の質問に答えてゆく。老人の名はルイス・アカバス博士。アグレッサの徵税代

官として、領主の為に日々領民から租税を搾り取る職務の責任者だつた。

「ん？……確かにヒヨコを半分にはできんな。ええと、雌鶏の卵を週に二三個づつ十週間納めるように、次！」

ただ、代官という職務にも関わらず、アカバスは慈悲深い感性と非常に合理的な頭脳の持ち主だつた為、領内が不況の時には課税額の見積もりを甘くしたり、取立ての際にわざと鯖を読んで物品を徴収し市民や農民を助けたりしていた。それ故、役場で働く者や市民は尊敬の念をこめて彼を先生と呼んでいた。

「あの先生、実はサリエリの件で……」

羽根ペンをインク壺に突っ込んだところでアカバス博士の手が止まつた。

「スタックハースト、一体サリエリがどうした？」

ウェルテは、自分が風邪を引いたこと、サリエリが仕事を代わつてくれたこと、その彼がまだ戻つてきていなことを手短に話す。アカバスは羊皮紙の束に視線を戻し、急いで羽ペンを動かしはじめた。「サリエリめ、またサボりか……こんどガツンと言つてやらねばならん。事情は判つた。とにかく、お前は風邪を治すように。今日はもう帰つてよろしい。次！」

ウェルテはアカバスに礼を言つて下宿へ帰ろうとした時、広間の同僚達がざわめき、部屋の入口を凝視した。

深みのある青いクローケと、青い羽飾りをのせた黒い三角帽を身に着けた男達が広間に入つてきた。どの街でも、三角帽は上級の役人や領主の家来達の正装として用いられている事が多かつたが、ここアグレッサでは、青い羽飾りのついた三角帽には特別な意味があつた。入つてきた男達はこの街の警察権を持つてゐることを示す為に、櫻でできた長い警杖を握つてゐる。その服装から通称 青騎士隊と呼ばれ恐れられる、領主お抱えの軍事組織だつた。

「ルイス・アカバス博士ですね？」

先頭の筋肉質の男が野太い声で聞いた。

「いかにも…… 青騎士隊が一体何の御用かな?」

アカバスは眼鏡を直しながら相手を睨みつけた。

「確認して頂きたいことがあります。外まで、『足労願えますか?』

男は威圧的にアカバスを見下ろした。

「先程、霞の森の入口で男が刺されて死んでいるのを見つけました。持ち物や容貌から、もしや徵税役場で働く者かもしれない……」ようやくアカバスは、羽根ペンをスタンドに挿して立ち上がり、自分の三角帽を頭にのせた。隣で話を聞いていたウェルテも嫌な予感に襲われ、青騎士達の後について役場から飛び出した。

役場の前には、青騎士隊の男達に囲まれた一台の荷馬車が止まっていた。アカバスが荷台の側によつて、遺体にかぶせられていたクローケを持ち上げた。アカバスはため息をつき、肩を落とした。

「先生……」

ウェルテが背後から声にならない声を発すると、アカバスは振り向きゆっくりうなずいた。ウェルテが馬車の荷台を覗き込むと、そこでは真っ白な顔をしたサリエリが眠るように横たわっていた。

その夜、ウェルテは、アカバス博士やサリエリと特に親しかつた役場の同僚数人と共に、サリエリの自宅へ弔問へと赴いた。すでに雇われた触れ役達が街中を走り回りながら、サリエリの死と葬儀の時間、場所を告知していた。

アグレッサ城に近い、街の東側にサリエリの実家はあつた。サリエリの一家は、五階建ての集合家屋の、二階と三階で暮らしていた。すでに玄関には黒い垂れ幕が掛けられ、その家に不幸があつとことを知らせている。アカバスを先頭にウェルテ達は垂れ幕をくぐつて家へと入つていつた。二階広間の中央には楡の木で作つた棺が置かれ、祭服を着た教会の僧侶が二人、死者の旅立ちの準備を進めていた。

アカバスは、部屋の隅に控えているサリエリの両親や兄弟達に挨

拶の言葉を述べ、父親の手を両手で握り締めた。ウェルテは棺の横に立ち、サリエリの顔を見つめた。今朝会った時より青ざめているが、普段と変わらぬ丸顔の優しそうな顔で眠っていた。ウェルテは今朝の、サリエリの親切心を思い出し、顔を歪めた。

「ぶどう酒は欲しくないのか？ サリエリ……」

そう言ってウェルテは手袋を取った手でサリエリの額をなでた。手にひんやりと冷たい感触が伝わってくる。ウェルテに同僚の死を実感させるのは、その亡骸の冷たさだけだった。

「なんでお前がこんな目に……」

僕の為に、こんな事になつて…… すまないな……

はるばるプラムベリーからやつてきた異邦人であるウェルテに、同僚としていろいろ手伝ってくれたのがサリエリだつた。未だサリエリの死に現実感が沸いてこず、ウェルテは涙を流すような心境にはならなかつた。同僚からだけでなく、農民や商店主からも慕われていたサリエリに敵がいたとはとうてい考えられない。

棺の方へアカバスがやつてきてウェルテに、遺族への挨拶をするよう促した。ウェルテは棺を離れ、サリエリの両親のもとへ行き言葉をかけた。

「こんなことになつて、言葉もありません…… それも今日に限つて……」

ウェルテはそう言ってサリエリが自分の仕事も引き受けってくれたいきさつを、サリエリの家族達へ話して聞かせた。

「誰がこんな恐ろしい真似をしたのか全く判りません。なんで、サリエリに限つて……」

すると彼の父親がうなずきながら棺の方を見た。

「お金を扱う仕事だから、多少の危険は仕方ないと呑はいつも言つていました。ただ実際にこの場になつてみると…… なんとも、やりきれない……」

すると隣で俯いていた母親も目淚を拭いながら言つた。

「これも神様の思し召しだと思つて、今はただ、あの子の魂の平安

を願つ……ばかり……」

そこまで言いかけて、とうとう母親はその場で泣き崩れてしまった。ウェルテはあわてて崩れ落ちる母親を、父親と一緒に腕をとつて支え、近親者達が彼女を介抱するために部屋の外へと連れて行つた。

挨拶を終え、ウェルテ達はサリエリの実家を後にした。帰り道、火の灯つたオイル・カンテラをぶら下げて真つ暗な街路を先導していたウェルテに、後ろからアカバスが声をかけた。

「スタッフハースト、お前、確か今日はどこまわる予定だつた？」
「霞の森にあるエルベ荘園の粉引き場とバルテルミ村の村長の家です」

本来、ウェルテが今日取立てに廻るべき場所で、サリエリに代理を頼んだ場所だつた。

「そうか……」

アカバスはそう一言だけ返事をして黙つてしまつた。

「あの、先生。サリエリはどこをまわる日だつたんですか？ それに、青騎士達はサリエリを見つけた様子について、なんと説明してくれたんですか？」

「方向はお前と同じく霞の森の方だ。騎士どもが言つには、バルテルミ村へ行く道ではなく、アイアン街道に近い、森の手前の路地に入つたところで胸を一突きされて倒れていたそうだ」

アイアン街道とは、西のデルブレー山脈の麓にあるノックス砦へと続く、霞の森を横切る通商路で、山脈の向うにある工業都市から主に金属製品を運んでくる道である。

「遺体を見た床屋や坊主に尋ねたら、やや幅広の刃物で一突きにされていたという。着衣に乱れはなかつたが、集金したはずの金は持つていなかつた。皮袋ごと持ち去られたようだ」

「ロバはどうなりました？ サリエリはロバに乗つて行つたはずです」

アカバスはうなずいた。

「忠実なそのロバは、主人のそばで草を食んでいた。騎士どもがも

う両親に引き渡していく。「

ウエルテは、他にサリエリの持ち物で盗られた物がないか尋ねると、アカバスは首を振る。

「着衣に乱れば少なくとも筆記具や剣もそのままでいたそうだ。剣で賊と斬り結んだ形跡もない」

ウエルテは怪訝な顔でアカバスの顔を覗き込む。「盗成なら身、アカリバ」

「盗賊たる臭くるみ剥かしてゆくはすてす 金たけ盗て 銃も脛も口バにも手をつけないなんて、そんな盗賊いるでしようか?」

アカバスはウエルテに顔を向けずに言った。
「清崎二二の筋の旨、お耳二二の、奥ハニ、立

青騎士の蹄の音でも耳にして、急いで立ち去ったのだった……
とにかく、我々の仕事には危険が多い。集金後は特にだ。スタック
ハーストも十分に注意しろ。しばらく霞の森には行かなくていい」
アカバスはそう言つて、広場で徴税役場の一団を解散した。アカバ
スや同僚達は各自自分のカンテラに灯を入れ、真つ暗な街路へと散
つていった。

翌朝、アグレッサの天井は灰色の雲におおわれていた。時々、小雨が落ちるなか、街の北側、市門を出た野原にある墓地でサリエリの葬儀は行われた。榆の木でできた棺の前には赤いローブ状の祭服を着た教会の僧侶が教典を手に祈りの言葉を吟じる。

「彼は、職務に忠実でした。そして、職務を通じて触れ合う全ての人々に対して、誠実に、そして愛をもつて接しました。何故彼のような者がこんなにも早く、天に召されるのか？ 残された者達の…

■ ■ ■
L

多くの会葬者が僧侶と棺を取り囲むようにして、黒い喪服もしくは喪章を身につけて立っていた。市民や徴税役場の関係者、そしてはるばる市外の莊園や農村からやつてきた農民の姿も見える。会葬者の片隅で、ウェルテはサリエリに最後の別れを告げるために帽子をとつて僧侶の声に耳を傾けた。

「一体、お前に何があつたんだ……」

「それには、我々には到底推し量る事が出来ない、天の御意志があるのです。彼の魂は我々より一足早く、救済への階段をのぼりはじめました。彼の旅が平安である事を祈りましょう。」
祈りが終わる、棺がゆっくりと墓穴の中へと下ろされていった。彼の親族がそこへ土をかけてゆく。

さよなら、サリエリ。もう、僕には何もしてやれないが、もし仇とめぐり合ひ幸運に恵まれる事があったら、その時は必ず剣を抜くよ……

ウェルテは棺に誓つて腰のレイピアの柄を掴んだ。

ワイングレットの田舎貴族

友人の旅立ちを見送り、ウェルテは朝食をとるためにロクサーヌの酒宿を訪れた。

「おはよう、風邪はもういいのかい？」

ロクサーヌがカウンターの向うから言った。

「おかげさま……朝ごはんお願い」

ウェルテはクローケと帽子をとつて近くのテーブル席へと腰をおろした。

カウンターにはエールの入ったコップを傾けているガスコンがいた。今日は仕事がないようで、いつも身に着けているチョッキのような袖なしの革の鎧ではなく、シャツの上にチュニックだけの軽装だった。

「やつぱりお前も葬式だったのか」

ウェルテの左腕に巻いてある喪章を見て、ガスコンが言った。ウェルテはうなずき、腕に巻いていた黒いリボンを解く。

「話は触れ役から聞いた。親しかったのか？」

ウェルテはうなずいた。

「この街へ来た時、とても世話になつた……」

ロクサーヌが食事を持ってやつてきた。硬いバタールと干し肉のシチューだった。バタールを細かく千切り、あめ色のスープに浸して口へと運ぶ。ウェルテは黙々と食事を済ませ茶を飲み干し、ロクサーヌへ食器を返した。

「なあガスコン、昨日、盗賊に襲われたと言つていたよな？」

「ああ、霞の森の抜け道でな」

ウェルテは唇を噛んだ。

「普通、盗賊つて身包み剥いで持つてくと聞いているけど、実際はどんな連中なんだ？」

「俺も数回しかやり合つてないから判かんねーよ。ただ普通は、足

が付きそうな品以外は根こそぎだらつ。……その氣の毒な仲間つて
いうのは、盗賊にやられたのか？」

「昨日、霞の森で。役場の上司はそう言つてた。それに青騎士隊も
盗賊の仕業と考えてゐるつて…… ただ、盗まれたのは金だけで、
乗つてた口バも、剣も服も手付かずだつた」
それを聞いたガスコンはしかめ面になつた。

「何だそりや？ よつぽど金に余裕のある盗賊だな」
カウンターにいたロクサーヌは思わず笑う。

「あんた、金があるのに盗賊なんてやる馬鹿な人いるの？」
ガスコンは舌打ちした。

「だろ？ つまりそんな仕事する奴は盗賊じゃねーんだよ」
黙つて聞いていたウェルテはうんうんとうなずいた。

「そつか…… 判つた。とりあえず僕は霞の森まで行つて来る。そ
いつが昨日回つたところへ行つてみようと思つんだ」
ウェルテはクローケを羽織りながら言つた。

「おい、一人でか？ 森は危ないぞ。」のホールを飲んじまつたら
俺もついてくぜ」

「お守り役なんかいらないよ。それに、久々なんだろ？ ロクサー
ヌと一緒に居てやれよ」

「ちょっと、何言つのさ。冗談もいい加減にしてよ
ロクサーヌが赤くなつて叫ぶ。

ウェルテはそんな声を背にドアに手をかけようとすると、外から
ドアが押し開けられ、異様なシルエットの人影が酒宿の入口に姿を
見せた。今朝からずつと沈鬱な表情だったウェルテの顔が、思わず
怪訝の色を湛えて歪む。ガスコンとロクサーヌもその来訪者の姿を
認め、眉間に皺を寄せた。

「おや、誰かと思えば、我が友たちではあるまいか

来訪者は、鼻にかかるつた声とゆつくりした語調でウェルテ達に挨拶
した。

開け放された木のドアの外に立つてゐるその男は、光沢のある絹

でできた群青色のクローケをはためかせて、酒宿へ入ってきた。ピカピカに磨かれた漆黒の乗馬ブーツにビロードのキュロットを履いた長い脚を納めている。男は酒宿の中を優雅な仕草で見回した。輝くばかりのブロンドの長髪は帽子の隙間から肩にかかり、白く端整なつくりの顔には品良く整えられたカイゼル髪を生やしている。だが、室内の三人が驚かせたのは、その奇抜な服装以上に奇怪なこの客の頭のせいだった。フェルトでできた紫のツバ広帽子の上には、これでもかというくらい銀色の羽毛飾り付けられ、反り返ったツバの周囲には白いレース生地が縫いこまれている。そして、頭頂部にはオレンジやリンゴ、ブドウを盛ったフルーツバスケットがのつかった。

「お、お前、そのなりはなんだ？」

我に返ったガスコンが唾を飛ばしながら叫ぶ。奇妙な客人は澄んだ青い双眸で退屈そうな眼差しを送りながら、高価なクローケから雨垂れの粒を払つた。

「相変わらず礼儀を知らぬな、パンタグリュエル。スタックハーストも久しぶりではないか」

そう言つてクローケを脱いだ客人は両手で帽子をとり、近くのテーブルに置いた。ゴトンと音がしたところを見るに、相當重い帽子のようだ。エリマキトカゲのようなひだ襟を着け、金糸を縫いこんだ白いフリルだけのジャケットを着た客人はテーブル席についた。

「お久しぶりね、ナイジェル卿。とりあえず、ようこそいらっしゃいました」

ロクサーヌは芝居がかつた仕草でスカートの両すそをつまんで会釈した。

「うんうん、ロクサーヌ。そなたはいつ見ても美しい。前にも言ったが、そなたさえ了解してくれたら、私はいつでもそなたを第二夫人候補か第三夫人候補に迎えるところなのだが……」

「あーら、光栄ですこと。でもあいにく、あたしには心に決めた人がいるので、他を当たつてくださいませ」

口クサー・ヌはそう言つてこれ見よがしにガスコンの肩に抱きついて見せた。この二人は会う度にいつも同じ言葉の応酬を繰り返してきてるので、ガスコンは完全に無視を決め込んでいる。

「そうか、実に残念だ……」

ナイジェルと呼ばれた男は舞台俳優のように掌を額に当てて嘆いてみせた。

この奇妙な風体の男、ナイジェル・サーペンタインはプラムベリーの街に程近いウイングレットの莊園領主の息子で、かつてプラムベリー城内でウェルテやガスコンと共に剣豪ヴァンペルトから剣術の手ほどきを受けた仲間であつた。ちなみに、この男の第一夫人候補は彼の父親であるウイングレット伯が決める事になつていて、それは未だ空席まである。その為、彼が外で心惹かれる女性は、全て第二夫人か第三夫人候補となるのだが、その座が埋まつたという話はまだない。

「ところでウェルテ・スタックハースト、さつきから黙つて私を見ているが、そんなに私の姿に魅了されたのか？」

呆れて言葉も出ないウェルテにナイジェルが尋ねると、すかさずガスコンが怒鳴る。

「んな訳ねーだろ！ その馬鹿げた格好に度肝抜かれてるんだよ！ それに、その果物屋の看板みたいな帽子は何のつもりだ！」

非常識なその格好は街中でも目立つ事間違い無しだ。

「無礼者！ これだから風流を解さぬ田舎者は困る。この帽子も上着も、エスカルの街で今もつとも流行りの仕立て屋に作らせた物なのだぞ」

エスカルの街はアグレッサの南、宗教都市グライトに近い被服産業の盛んな街で、流行の発信地としても名高い。ただ、その街の権威ある仕立て屋達の傑作が一般市民層によく理解されているかというと、それは非常に怪しい。

ウェルテは古いなじみ乱入に苦笑いを浮かべた。この朝初めて浮かべた笑みだった。

「変わんなないなナイジェル…… 来たばつかで悪いけど、仕事だからこれで。時間があつたらまた」

「おい、待てよウェルテ」

ガスコンの呼びかけにも応ぜず、ウェルテはそう言つて帽子をかぶると酒宿を後にした。

「あーあ、行つちまつた…… それはそつと、お前一体何しに来たんだ？」

「エスカルやグライトで開かれていた大市を巡つていたのだ。たまたまアグレッサにも用ができたので寄つたまでのこと。だが、ウェルテもお前もどうもせわしない。これだから平民は余裕が無くてつまらん」

ナイジェルはそう言つて椅子に腰掛けた。

「ところで、今、城門の前で赤い上着を着た騎士達を見たが、どうやら私と同じようにグライトから教会の幹部が訪れているようだね」「グライトに駐屯するフォルス教会の教会騎士団達はいつも、磨きぬかれたプレートメイルの上から赤いサークルとマントを羽織つて、教会の上級聖職者達の護衛についている。赤い衣をまとつた騎士達がいるという事は、そこに教会の実力者がいる事を意味していた。

「だから、いつも教会がらみの愚痴には気を付けるって言つてんだ！」

ガスコンは昨日ロクサーヌの愚痴を思い出し、思わず彼女を怒鳴りつけた。

「しようがないだろ？ 文句の一つも言いたいくらいこつちも力ツカツなんだよ」

ロクサーヌは口を尖らせる。

「確かに聖職者には、盗賊やごつつく領主以上に注意しなければならない。彼等こそ、神を使つたギルド顔負けの商人集団だ」ナイジェルはそう言つて上着の内ポケットから細長い煙管を取り出し、ロクサーヌに炭火を分けてくれるよう頼んだ。

新世界 と呼

ばれる海を越えた大陸で栽培される特別な薬草を乾燥させ、みじん切りにして管に詰め、そこに火を付ける。すると、やたらと臭う煙が管から周囲に撒き散らされる。それを一生懸命に吸い込み、一時的に軽い陶酔状態を味わう娛樂が生まれていた。まだまだこの大陸では一般的ではなかったが、この遊びは一部の貴族や商人達の間で少しずつ流行り始めていた。

「まーた、お香を吸つてる。新世界つて妙な物が多いのねえ。一度どんなところか行つてみたいわ」

ロクサーヌは興味深そうにナイジエルの火遊びを眺めていた。一方、ガスコンは鼻をつまんで激しく咳き込む。ガスコンとウェルテは以前から、ナイジエルの撒き散らすこの「お香」の刺激臭が大嫌いだった。

「いい加減にしろ。表でやれ！ 喉が……ゲホゲホッ、満足にエールも飲めねえ！」

ナイジエルは煙を一吹きすると、ため息をついた。

「嘆かわしい……パンタグリュエル、お前は本当に風流の判らぬ男だ……それに、こんな時間に酒を飲んでいるところを見るに、さては職にあぶれているな？」

ナイジエルはそう言つてガスコンに煙を吹きかけた。

「よせつて！ ゴホッゴホッ……戦が無いんだからしじうがねえだろ！」

「傭兵なんて、損な仕事を選ぶからだ。だが、心配せらずとも戦ならもう間もなく始まりそうだ。グライトでは教会が異端討伐軍を組織する為、兵隊を集めていた。それを聞きつけて、あちらこちらから荒くれどもが集まつて来ていたぞ。お前も行つてみてはどうだ？」ガスコンは禁句を聞いたような表情で手を振つた。

「そいつはご免だな。教会の絡む戦は、相手がはなから人間扱いされてねえから戦い方も滅茶苦茶なんだよ。戦の誉れなんかありやしない。でも、百歩譲つて戦闘自体はお互い様だからまだいい。だが、終わつた後の殺戮、暴行、略奪の乱痴気騒ぎには歯止めが利かねえ。

日頃取り澄ましている貴族や騎士、果てには教会の坊主までもがモ
ンスターみたいになつちまう「

それを聞いてナイジェルは笑つた。

「そもそも、殺し合いには善れどころか、道理も無法もあるまい。
『道理に沿つた殺し』など、それこそ異端討伐軍付き祭司の言いそ
うなこと」

若い貴族は暖炉の前で、煙管から灰を落とすと、それを元あつたボ
ケットへとしまう。

「さて、そろそろ失礼しよう。今日はまたも辛い失恋もしてしまつ
たので、このわびしさはアグレッサの町娘達に癒してもらつとしよ
う」

そう言つてナイジェルは氣前良くなゴルド金貨をテーブルに置いて
立ち上がつた。

「一、二日はアグレッサにいるつもりだ。時が許せばまた会おう」
ナイジェルはクローケを着て、派手な帽子を頭にのせた。

「あーら、今日はお早いのね？ ところで、お泊りはどちら？ な
んなら上の部屋空けときますよ」

ロクサーヌが、テーブルの上の金貨に目を奪われながら尋ねた。

「申し出には感謝しよう、愛しのロクサーヌ。たしかにアグレッサ
でここほど清潔な宿はないからな。だが、今回はアドリアーノ・オ
ストリッヂの家に滞在する事になつていて。なんでもあの商人、近
々面白い物が手に入るから見に来て欲しいとエスカルまで手紙を寄
越してきたのだ」

オストリッヂといふ名を聞いてガスコンは顔を引きつらせた。

「さらば、友らよ……」

ドアが閉まると、ロクサーヌは金貨を握り締めて軽やかに体を一
回転させた。

「やつたー、ねえガスコン、肉屋で牛肉でも買つて、今夜あたりシ
チューにしない？」

そんなロクサーヌの声も遠く、ナイジェルが去つた後、ガスコンは

炭酸の抜けきったエールのコップを置き、難しい顔をして腕を組んだ。

「アドリアーノ・オストリッチ……」

よりもよつて、つい昨日自分が汚れ仕事を請け負つたばかりのオストリッチ商会と、その当主に会いに来たという古いなじみ……ガスコンは口をあけたまま歯軋りした。昔から治らない、無意識に出来る悪い癖だつた。十代の頃から戦場で培つてきた、自分の動物的勘が厄介事の前触れを伝えている証だつた。

ウェルテはアグレッサの西門をくぐり、石敷のアイアン街道を西へと急いでいた。アグレッサの街は平野部の真ん中にあり、町の周囲は草原となつていて、遠くには羊の群れを追いかけてる牧童や、収穫直前の麦畠を見て廻る農夫の姿が見えた。アイアン街道はその平原の真ん中をまっすぐ西へ向かつて伸びていた。

サリエリは昨日、ほとんど同じ時間にここを通つて森へと向かつたはずだった。歩みを進めながら、ウェルテはサリエリと初めて会つた時の事を思い出した。

読み書きとソロバンができたウェルテがアグレッサの徵稅役場で見習い兼下働きの仕事を得たのは一年前の事だ。

「よう！ プラムベリーから来たんだつて？ あそこはアグレッサより暖かくていい所なんだつてな？」

そう人好きのする笑顔で気さくに話しかけてきたのがサリエリだつた。もう住む場所は決まつていてるのか？ と問うサリエリにウェルテは町の北側にある下宿屋にしようかと思つていて応えた。

「やめとけ、やめとけ。盛り場に近すぎる。酒を飲みに行くには近くていいけど、あの辺は夜中も騒がしいし。ならず者も多い。それに、あの界隈はネズミやシラミが多い地区だ。下手な部屋に入つたら大変だぞ」

それを聞いたウェルテはさぞ青い顔をしていたのだろう。サリエリは大きく笑いながら言つた。

「心配すんなつて。もつといい、きれいな部屋を紹介してやるよ」そしてサリエリは、街の西側にある住宅街にある、こじんまりとはしているが瀟洒な下宿を紹介してくれた。実際そこは、清潔で日当たりも悪くない、手ごろな宿賃で生活できる部屋だった。以来、ウェルテはそこにから役場へと通つていて、

その後もサリエリは、ウェルテになにかと世話を焼き、ウェルテ

はアグレッサでの生活にすぐに慣れることができた。仕事の外回り先で一緒にサボつて昼寝をしたり、時には酒を飲み、酔つ払つて下手くそな詩を吟じて酒場の笑いものになつたり、調子にのつてハマつた賭けすごろくで危うく破産寸前になつたりと、くだらないが非常に楽しかった思い出がウェルテの脳裏に蘇つてくる。

ウェルテから見て、そんなサリエリに恨みを抱く人物がいたようには思えなかつた。顔に似合わず農村の娘に良くもてていたのは、ウェルテも知つていたが、そのせいで恨みを抱かれたりトラブルになつたという話も聞いたことが無い。むしろ、その手の愚にもつかないトラブルはナイジェルが一、二度もちこんできたことがあつたが……

一方で、もし怨恨ではなく、通りすがりの場当たり盗賊にやられたのだとすれば、それはそれでやりきれない事だ。確かに盗賊はアグレッサに限らずどこにでもはびこつてゐる。事実、ガスコンも同じ日に霞の森で襲撃を受けたくらいだ。森の中には複数の盗賊団が潜んでいるとも言っていた。サリエリは不運にも、その凶悪な盗賊に巻き戻してしまつたのだろうか。そこまで想像し、ウェルテは急に怒りが吹き上がつてくるのを感じていた。

ウェルテは、昨日からサリエリの足跡を辿る事にしようと決めていた。そうすれば、今はまだ全く判らない事件の一端が自分にも理解できるかもしれないと思つたからだ。その為に、今日は日の昇る前に起き出し、レイピアとマンゴーシュの刃を入念に研ぎ、油を引いておいた。ウェルテは決して粗暴でも、好戦的な性格でもなかつたが、その腕に覚えが無いわけではないし、以前に友人の持ち込んだトラブルに巻き込まれ、止む無く剣で物事を解決した事もある。もし途中で盗賊が向かってこようものなら、今回ばかりはサリエリの仇とばかりに容赦無く斬り倒すつもりだつた。

ウェルテは馬の鳴らす蹄の音で我に返つた。さつきから何度も、荷台を膨らませた多くの荷馬車が、ウェルテを追い越したり、すれ違つたりした。この街道はアグレッサを支える大動脈の一つであり、

使われている馬車や馬などの運搬手段は全てアグレッサ荷車ギルドに加盟しているか、もしくはギルドと提携した領外の商人のものだつた。

街を出て一時間半ばかり歩くと、街道は鬱蒼とした森の入口に差し掛かる。アグレッサ領の西に広がる霞の森の入口だつた。街道は森を切り払つてまつすぐ西のノックス砦へと繋がつてゐる。今日の空は曇り。霞の森には薄いもやが掛かつてゐた。舗装された街道をしばらく進むと、木々を伐採してつくつた、馬車が一台並んで通れるくらいの幅の砂利道が右手にあらわれた。

ウェルテは街道を離れ、森の奥へと繋がるその枝道へと進んでいた。街道から逸れた途端、人の往来はほとんど無くなつた。この先、道は何度か枝分かれして、領主直轄農地であるエルベ荘園へとつながつてゐる。帽子やクローケがもやに晒されて湿つてゆく。じめじめとして涼しい森だ。耳に届くのは小鳥の声と砂利を踏みしめる足音だけだ。ウェルテが足を進めると、道の右側に丸太でつくれた人の背丈ほどの塀があらわれた。塀はまるで砦の柵のように森の奥からこの枝道の横を走り、また森の奥のほうへと続いてゐる。塀の奥は領主専用の狩猟用鳥獣保護区になつており、許可の無い者の立ち入りは硬く禁じられていた。その塀は、保護区内の鹿や猪、狐など、狩りの獲物が外へ逃げてしまふこと防ぐ為のもので、森の恵の枯渴を防ぎその独占を保証するためのものだつた。

塀が見えなくなり、さらに歩きつづけると森が広く切り開かれた耕作地に出る。簡単な木の柵を越え、ウェルテはエルベ荘園へとやつてきた。開けた視界には耕作地が広がり、そのまん中にこじんまりとした集落がある。ウェルテは畑のあぜ道をつたつて集落へと向かつた。そこでは農夫達が、藁をふいた家のひさしの下にしゃがみ、硬そうなパンをかじつてゐる。ちよつと昼食の時間だつたようだ。

「ここにちはー」

ウェルテが挨拶すると、農夫達は顔を上げた。

「毎度どーも、お役人様」

「あんれ、今日もおいでですか？ たすか昨日も、よく肥えた方が
ロバに乗つて、来なすつたけども？」

やはりサリエリはここへは來ていたんだ。

「今日はちょっと別件で。 そういうえば、そいつ昨日はいつ頃ここ通
つたか判りますか？」

「丁度、昼飯の一時半ほど前だつたかね？」

ウェルテは愛想良く笑つてうなずいた。

「そつか、ありがとう。お邪魔しました」

ウェルテは足早に集落を通り抜けると、ウェルテは先程よりも厳しい表情になつた。今、アグレッサは収穫期を迎へ、最も食料が豊富な時期だつた。この時期は貧しい小作農ですら、それなりの贅沢が許される季節だつた。だが、今見た農民達は一人一組で一つのパンを分けて食べていた。それ以上にウェルテが驚いたのは、昼食がその半切れのパンだけだつたことだ。数週間前に来た時は、彼らも野菜や煮込み料理などのおかずも食べていた。今年の穀物の収穫数は危機的に少ないのでと感じ、ウェルテは強い不安を感じ始めた。食糧不足は農村だけでなくその地域一帯の安全を脅かすからだ。

そのまま、ウェルテは村はずれにある粉挽き小屋へと向かつた。粉挽き小屋は莊園に流れる小川の辺に建てられていて、小屋の横には動力の源である水車が回つていた。そして、小川の向うには三階建ての頑丈な石造りの館が建つてている。それは、マナー・ハウスと呼ばれる領主の別宅と代官所を兼ねた建物で、莊園の農民達を監督する役人達が詰めている。

もつとも、ウェルテがいつも仕事で訪れるのはマナー・ハウスではなく、その手前の粉挽き小屋の方だつた。この村は領主の莊園にあるので、そここの地代はすべて莊園付きの代官に直接納められる。だが、直接農業に従事していない粉挽き業者だけはウェルテのような徵稅吏を通して領主に税を納めていた。

ウェルテの背丈の一倍半はあるかという大きな下射式水車が水音を立てながらゆっくりと回つている。木造の粉挽き小屋の開け放た

れたドアから中を覗くと、粉屋のヒッグスが昼飯を貪っていた。小屋の作業場では木でできた歯車が組み合わされ、大きな石臼が回っている。

「また来たのか！ 支払いは昨日済んだはずだぞ」
ウェルテを見るなり、太っちょのヒッグスは小屋の騒音に負けないよう怒鳴る。

「ということは、昨日、僕の代理が来たんだな？」

「何訳の判らないこと言つてやがる。おたくが風邪引いたからつて、口巴に乗つたでかい奴を寄越しただろ？ こつちは二十シルバも分捕られて涙もでねえよ！」

ウェルテはうなずいた。サリエリはここでウェルテの替わりに、きちんとヒッグスから税を徴収していったのだ。

「ならいい、別に徴収に来たわけじゃない」

そう言つと、粉屋は少し落ち着いた様子で昼食を再開した。粗末な小さいテーブルの上には硬いパンと肉団子の入つたスープにオレンジ、それにエールまである。

どこの村でも粉屋は儲かる商売だった。というのも、農民が領主へ地代を納める場合、主要作物である麦を粉にした上で換金してから納めなければならなかつた。だから、農民は水車小屋と大きな臼を持つ粉挽き屋に依頼して粉にした上で現金に換えてもらつていた。その際、必ず粉屋から加工費と手数料をとられるのはいうまでもない。だつたら、農民は自分で麦を粉にすればいいでのはということになるが、この大陸の東側では、各地の領主が石臼と粉挽きの権益を完全に押さえていた。一般市民や農民による石臼の所有は厳しく制限され、粉挽き業は完全な免許制がとられていた。

ことアグレッサでは、もぐりの粉挽き行為は重罪であり、見つかった者は青騎士隊によつて容赦無く両手首を切り落とされた。もし粉屋を始めようと思う者は最初に、領主へ莫大な免許料を支払つて石臼や水車小屋を設置する権限をもらい、毎月特別税を払つづける必要があつた。だがそれらの負担を差し引いても、粉屋は実入り

多い商売だった。

「で、何しに来たんだよ？」

ヒッグスはスープをズルズルとすすりながら訝しげな目でウェルテを見た。ウェルテは腕を組んで壁に寄りかかり、回っている石臼を見ながら言つた。

「ここへ来た僕の代理……昨日、森で殺された。犯人を探してゐるヒッグスがむせて顔を上げた。

「おい、冗談だろ？」

ウェルテの眞面目な顔を見てヒッグスは表情を硬くした。

「どこでやられたんだ？」

「街道沿いのわき道で森の入口に近いところだけ聞いてゐる。彼が来て、何か変わつたことは無かつた？」

ヒッグスは首を振つた。

「知らん、知らん。俺は言われるまま今月の水車税と臼税を払つて……いいか俺は確かにちゃんと一十シルバ払つたんだぞ？」

「それはわかつたから、それで彼はどうしたんだ？」

「口巴に乗つて来た道の方へ帰つたよ。なんか、まだ回るとこがあるとか言つてたな」

ウェルテはため息をついてうなずいた。

小川の向うに見えるマナーハウスの入口では、数人の男達が長剣を研いでいる姿が小さく見えた。

「ずいぶんと賑やかだな、領主はまた狩猟会でも開くのか？」

平時に大きな剣を差しているのは騎士や兵士を除けば、獵師くらいのものだ。

「かもな……俺達には関係ねえよ。ただ、なんか狩人みたいなやつらが大勢来ていて、ちょっと騒がしいんだ。あ、そういうや……」

ヒッグスは食卓から顔を上げてマナーハウスの方を見た。

「昨日は丁度、ギルドの荷馬車が何台か来ていて、食い物をやたらあの館へ運び込んでいた。おたくのその氣の毒な奴が、宴でも開かれるのかつて聞くから、わからねえつて答えたけど、なんか興味深

「 々つて感じで見てたぜ」

ヒッグスの話を聞きながら、ウェルテはマナーハウスを見つめていた。三角帽を被った代官所の役人らしき男達が、ウェルテのいる水車小屋を警戒するように見つめていた。

「 そうか、ありがとう。食事中にお邪魔様」

ウェルテはそう言って水車小屋を後に、元来た道を引き返しはじめた。敢えてマナーハウスの方を見ないように歩いてきたが、村はずれで一度振り返ってみると、三角帽の男達は依然、ウェルテをじつと見張っていた。

次の『仕事』

昼下がりのアグレッサ。防水の為に外側に蟻を塗つた茶色のクローケに、羽飾りなどとうになくなつてしまつた、変色した革のツバ広スロー・チハツトといつてたちで、ガスコンは教会前広場の市へ向かつっていた。

ナイジエルの来訪によつて思わぬ臨時収入を得たロクサーヌが、肉をたくさん買い込んで皆でお腹一杯食べようと提案したのだが、今朝葬儀に出席したばかりで氣の沈んでいるウェルテの事を考え、それは延期することになった。代わりに今夜は一人で、いつもより上等な酒を楽しもうという事になり、ガスコンがその買い物のお遣いに出される事となつた。

酒宿には当然、エールもぶどう酒も用意してあるのだが、どんなにしつかり密封しても、醸造から時間の経つた酒は泥水みたいになり、風味も酷いものだつた。アグレッサで作られた物ならば新鮮な酒もそれなりに安く手に入るのだが、気候や土地のせいが、アグレッサで作られた酒や食べ物は概ねに不味いことで知られている。ぶどう酒の名産地である北方の街カベルネや、良質の大麦がとれるグレープスの穀倉地帯からは、状態のいい新鮮なぶどう酒やエールが快速荷馬車で届けられていたが、当然それらの上質な酒は高価だつた。

教会の大きな鐘楼が見下ろす広場には多くの露店が開設され、様々な品物を並べた店の間を、多くの商人達や買い物客が行き来していた。毛織物や高価な綿織物に群がる商人や仲買人の人山を避け、ガスコンは広場の端を迂回するようにして、目当ての店へとやつてきた。広場に面する店舗前には荷馬車が止まり、馬車から降ろされた大樽がいくつも並んでいる。

「ガスコンはロクサーヌから渡された小ぶりの樽を店番の男へ渡す。カベルネのぶどう酒とグレープスのエール。上等な新しいやつを

頼む

「わかりやした、今届いたばかりの酒ですよ」

男は手早く樽の天板に穴を空けると、計量容器に深い赤紫色のぶどう酒を注ぐ。色は透き通り、ルビーのようだ。ガスコンの鼻腔に濃厚な土と果実の匂いが届いた。いつも田にする、黒く濁つたカビ臭いぶどう酒とは大違いだ。もっぱらぶどう酒よりもエールを好んで飲んでいるガスコンだが、そのぶどう酒を前に思わずツバを飲み込んだ。同じ要領で店番はもう一つの小樽にエールを注ぐ。黄金色のエールが炭酸によつてジュワッと泡を作る。ガスコンは今日の夕食が待ち遠しくなってきた。

「えーと、あわせて一十三シルバになりやす」

「あ？ ああ、わかつた」

あまりの高さに一瞬驚いたが、ガスコンは慌ててロクサーヌから渡された革袋から銀貨を取り出し、店番に渡す。店番は金を受け取ると小樽に栓をした。

「重いからお気をつけて、毎度どーも」

ガスコンは注意深く小樽を抱えて酒宿へと帰路についた。もし、うつかりして酒をこぼそうものなら、ロクサーヌからどんな目に遭わされるか判つたものではない。そう気を付けているそばから、ガスコンは居酒屋からふらつと出てきた男とぶつかりそうになつた。

「おつととと……これは、失礼を…… おや？ これは、あの時のお兄さん」

男は千鳥足でふらつきながら、ガスコンを見て笑つた。荷馬車の護衛をやつた時に同じ馬車にいた、ブロードソードを腰に下げた酔払い男だつた。もうかなりできあがつてゐるらしく、かなり酒臭い。

「あん時のお兄さんじやねーか。昼間から酒か。羨ましいぜ」

呆れた様子でガスコンが言つと、男は笑つて首を振る。

「もう金が無い。駄目駄目だな、アハハ…… おや？ この匂いは」

男は急に鼻をクンクンと鳴らし始めた。

「ん…… これは、上物の匂いだ…… お兄さん、いい酒持つてるね……」

ガスコンは思わずしかめ面になり、まるで外敵から赤ん坊を庇う母親のように酒樽を抱きしめた。男はきしと笑つて手を振つた。

「し、心配…… いらない。小生は、この安工ールで、十分……

素晴らしきや、無炭酸のエール」

男はしゃつくりで途切れ途切れになりながら笑い、空っぽの杯を掲げた。ガスコンはため息をついた。

「おっさんも飲みすぎて、怪我しねえよくな。じゃあ俺はこれで「ああ、お兄さんも達者で…… ああ、そういやお兄さん、新しい仕事の話は…… 知つてるかね？」

ガスコンは振り返り、怪訝な顔で首を振つた。

「さつさき…… 北にある酒場で、この前の仕事を寄越した男に……

声を掛けられた。新しい仕事…… だそうだ。引き受けて成功した

ら、二「ゴルド」と…… 三十シルバ払うとかなんとか」

「二「ゴルド」だあ…… そりや、何の仕事だよ」

ガスコンは驚いた。余りにも高すぎる報酬だ。密輸の護衛以上にヤバイ仕事だという事は明らかだ。男はよろけて、ガスコンにぶつかりそうになりながら、耳元ではつきりした声でつぶやいた。

「殺しの依頼だ」

やつぱり、思つた通りだぜ

ガスコンは舌打ちした。

「で、おっさんは引き受けたのかよ？」

男は笑つて首と杯を振つた。

「いやいや、まさか、まさか…… 小生はやらない。そういう危ない仕事は…… やらない。ただ、お兄さんは腕が立つ。且当ての首はそれなりの剣豪だそうだ。興味がある…… なら、この前、品物を運び込んだ…… あの倉庫へ行つてみたらいい」

男はそう言つて手を振ると、千鳥足で市の雜踏の中へと潜つていつた。

ガスコンは男の背中を見送りながら、ため息をついた。ガスコンには、自分でも身分不相応だと思つてしまふくらいの矜持を持つていた。戦いの場以外で無駄な殺生はしない。たとえ、戦いに参加するにしても、自分がその都度納得できる雇い主の下でしか戦わない。確かに「ギルドの報酬は魅力的だつたが、欲張りな商人に金で釣られて殺し屋になるつもりは元より無かつた。だが、荷車ギルドが臆面もなく殺しの依頼までしてきた事には、ガスコンも驚いた。ガスコンは樽を抱えて一路、大通りを南へと歩き出した。昨日、襲撃者から守りきつた密輸品を運び入れた蔵は南門近くの街外れにある。

ギルドのやつら、何企んでやがる……

それに、昨日自分達が守つた品物がどうなつたかも気になった。街道をしばらく歩くと、低層の粗末な住宅が集まる街外れへとたどり着く。ガスコンは舗装された街道から脇道へ曲がり、昨日の朝、荷馬車に乗つて訪れた倉庫の集まる一角へ足を踏み入れた。このあたりは人の往来もまばらだ。ガスコンは人に出くわさないように忍び足で、辻の横に設けられた水汲み場の陰に身を隠し、ギルドの隠し蔵のほうを覗く。

平たい三角屋根の木造倉庫、その正面の木戸は開け放たれて、中まで良く見えた。入口付近では五、六人の男達がたむろしていた。どれも、街の北側でよく見かけそうなヤクザ者みたいな男達ばかりだ。そのなかで、一人だけ見知った男がいた。この前、自分に荷馬車護衛の仕事をもちかけてきた荷車ギルドの仲介人だ。

おつさんの言う通りだな……

ガスコンは薄暗い倉庫内へと目を凝らす。床一面イグサが敷かれているだけで倉庫は空だつた。自分が運び込んだ木箱はもうここには無いようだつた。

疑問は膨らむばかりだつたが、これ以上ここにいても得るものも無いので、ガスコンは樽を抱えながら静かにその場を立ち去る事にした。

その後、サリエリはどこへ向かつたのだろう？ ウエルテは森の道を歩きながら考えた。到着の時間から考えて、サリエリはアグレツサを出てまっすぐにエルベ荘園へやつて来たに違いない。だが、その後サリエリがどこへ向かつたのかは判らなかつたので、サリエリへ寄るようにならんだ、森の南側にあるバルテルミ村へと向かうことにした。そこへ行けばサリエリが訪れたかどうかも判る上に、もし訪れた時間が判ればサリエリの足取りがもつとはつきりすると思つたからだ。もし遅い時間帯に村を訪れたのなら、サリエリはどこか森の別の場所に寄つたことになるし、そうではなく午後の早い時間帯だつたら、エルベ荘園から直接村へ向かつたのだと見当がつく。 ウエルテは街道を目指して、もやのかかる細い砂利道を南へと向かつた。バルテルミ村はアイアン街道を挟んだ森の南側にある、林業とわずかばかりの開墾地からなる小さな村だ。

荷車が行き交うアイアン街道を渡り、ウエルテは森の南側へと向かう。街道沿いで真昼間に盗賊に襲われるとは考えにくかつた。四方へ伸びる街道はアグレツサの大動脈である。そこを荒らしまわる者が出ではアグレツサの経済に大きな影を落とす事になるため、領主フランツ・ド・ゾロツソは強力な職業軍人集団を雇つて青騎士隊を組織し、市街と街道の治安維持に当たらせていた。粗暴で威圧的な彼等の剣の矛先は盗賊だけではなく、時に領主に反抗的な領民にも向けられることが多かつたので、領内での評判は悪かつた。しかし、この強力な武装集団によつてアグレツサの安定が保たれている事も事実だつた。そんな青騎士隊がよく巡回する昼間に盗賊がこの近辺に姿を見せるとは考えにくかつた。

森を三十分程歩いた頃だつた。鳥の鳴き声に混じつて、ウエルテは左の方角から砂利を踏みしめる足音を耳にした。ウエルテは足を止め、その方角へと目をこらす。白く霧のかかつた木々の間から、

男が歩いているのがうつすらと見えた。まだその男が危険人物かどうかは判らなかつたが、ウェルテは木の幹に隠れて様子を伺つた。

左の方から來た男は、ウェルテに気付かない様子で足早に歩いてゆく。ツバの短いチロリアンハットにゆつたりとしたオーバーとう姿で、大きな革の鞄を携えていた。瘦せた口バのような面長の白い顔がはつきりと見え、ウェルテはその男を思い出した。

あれは床屋のアンヘルム……

アグレッサの理髪店兼施療院で働く床屋だつた。床屋がこんな森の中で何をやつているのだろうかとウェルテは訝しく思った。

街の住人を除き、施療院の床屋に治療や散髪を頼むにはかなりの金がかかる。それも、森の貧しい村に往診を頼めるほど豊かな者などいるのだろうか。ごく稀に、医者を兼ねる床屋が郊外に住む富農に呼ばれて往診に赴く事もあつたが、これから向かうバルテルミ村にはそんな裕福な人間はいなかつた。

それ以上にウェルテを怪しませたのは、その床屋の周囲を警戒するような素振りだつた。ウェルテの存在にこそ気付かなかつたものの、アンヘルムはやたら周囲をキヨロキヨロと見回しながら足早に歩いてゆく。ウェルテは相手に気取られないように、なるべく足音が立たないよう、固い木の根っこを踏みながら、アンヘルムの後を追つて村へと向かつた。

しばらく行くと、アンヘルムは村へ続く道ではなく、村のはずれへと繋がる小径へと入つて行つた。その方角には家屋はなく、村長が管理している共同の穀物倉が建つてゐるだけだ。ウェルテは首を傾げながらも、もやで霞むアンヘルムの背中を静かに追いかけた。

やはりウェルテが思つたとおり、アンヘルムは村の穀物倉へとやつてきた。その一角だけ木々が伐採されて開かれた真ん中に、葺き屋根、木造平屋の倉が建つてゐた。まるで見張り番のように倉のそばに立つていた男と挨拶を交わし、アンヘルムは促されるまま足早に倉の中へと入つていつた。

ウェルテは遠くからそれを見届け、バルテルミの村落へ向かう事

にした。バルテルミ村の集金はウェルテの担当であり、村長とも顔なじみだった。元々、その村長に、サリエリの事も尋ねるつもりだったのを、倉に床屋なんかを呼んで一体何をしているのか尋ねればよいと思つたのだ。村長が村の穀物倉で何をやつているのか知らぬ筈がないし、尋ねればこの不可解な事の正体も簡単に判るだろう。そう合点し、ウェルテは音を立てないようにその場を離れようとした。

もやの向こうから、やかましい犬の吠える声が聞こえてきたのはその時だった。思いのほか近い。ウェルテはぎょっとして立ち止まつた。こんなに執拗に吠えかかるのは、狼か獵犬くらいのものだ。ウェルテは鳴き声の方角から逃れるよう森の奥へ後ずさつたが、その声はまっすぐ向かつてきた。さらに左の方からも別の犬の吠え立てる声が迫つてきた。白いもやの向こうから大きな犬と引き綱を手にした男がウェルテへと向かつてくる。左からも同じ様に、犬に先導された男がまっすぐウェルテに迫つてきた。

獵師達か？

狼か野犬の襲撃だと想い身構えたウェルテだったが、人に連れられた犬だと判り緊張を解く。だが予想に反し、その男達は突進してくる犬を制止しようともしない。頭の高さがウェルテの腹部に届くくらいの、大きな茶色い犬が真っ赤な舌と白い牙を剥き出しにウェルテに飛び掛つた。ウェルテは思わず悲鳴を上げて後ろへたり込んだ。ウェルテの喉笛を狙つた牙が宙を噛み、犬の生温かい唾液の粒がウェルテの頬に当たつた。引き綱を手にした男がギリギリのところで、後ろから犬を引っ張つていた。もう一匹もウェルテの鼻先のところで猛烈に吠え立っている。

耳がだらりと垂れた茶色と黒の毛並みのその犬は、引き綱がなければ今にもウェルテを食い殺さんばかりに、絶え間なく吠え、牙を見せつけた。大きな雄鹿に止めを刺すよう訓練された獵犬、ブランドハウンドだった。

「この狼藉、何のつもりだ！」

ウェルテは声を震わせながら男達に怒鳴った。領主お抱えの獵師達は態度が悪く、横柄な事で知られていたので、犬が勝手に走り出したか、それともウェルテに性質の悪いからかいをしかけたのかとも思われた。だが、ウェルテはそれが間違いである事に気付く。男達は手にした綱で犬を引っ張りながら、険しい顔でウェルテを見据えている。二人とも革の丈夫なチョッキを着て、腰には軍用の帶剣ベルトを締めている。腰や手に獵具はなく、弓矢も持っていない。獵をしていたわけではないようだ。そして一人の男達は、空いた手でおもむろに腰から短剣を引き抜いた。

ウェルテは余りの事に驚愕しつつも後ろへ飛び退き、左腰から力ップ状の護拳がついた剣を引き抜いた。ウェルテのレイピアは、流行の軽くてよくしなるレイピアではなく、刀身がやや肉厚でほとんど剣先が揺れない剣だった。剣で解決すべき完全に手荒な事態へといきなり飛び込んでしまった事をウェルテははつきりと自覚した。

「やるつもりか！」

ウェルテはそう叫びながら、レイピアの剣先を近くのグレイハウンドの鼻先で振った。風切り音とともに犬はひるんで後ろへ飛び退く。すかさず二頭目の鼻先にファンデブ（突き）を繰り出すように踏み込み、鼻先で寸止めした。やかましい二頭の獣は一旦、萎縮したようにはいたが、尚もウェルテに牙を剥いて吠えかかる。

ウェルテは中段に剣を構えたまま、広く間合いをとつた。レイピアにとつて大切なのは突きに適した間合いだった。男達はウェルテを斬りつけようと、短剣を構え左右から挟むように間合いを詰めてきた。多勢に無勢、人間二人ならなんとか対処できるが、犬が厄介だった。最初に犬を倒し、その後人間をやつつけるしかない。

ウェルテが剣を一振りしつつ、右腰のマンゴーシュへと手を伸ばした時、背後で土を蹴る音がした。ウェルテは気配を感じ、自分の隙を呪つた……剣を後ろへ振りたかったが、もう間に合わない。背後からの重い衝撃が腎臓の辺りにぶつかり、体中に伝染するように痛みが走った。思わず前方へ突つ伏しそうになり、ウェルテは膝

立ちになつた。即座に金属の冷たい感触が右の首筋に当たる。黒い革手袋が視界に入るや、背後からウェルテの頭を上へと引っ張り上げた。かすかに果物のような香りがした。

「一人でノコノコといい度胸だ。貴様のような奴を寄越すとは、ギルドも焼きが回つたようだな！」

背後の敵がウェルテの耳元で叫んだ。

や、やられた……

押さえつけられたウェルテは、寒氣のするような絶望感に襲われた。身動きが取れないので視線を巡らすと、自分の首筋には細い鋭利なダガーの剣先が突きつけられている。ウェルテの左手は右腰のベルトに吊つた短剣の柄を掴んでいたが、今からそれを引き抜いても、背後の敵を突き刺す余裕はないだろう。

あまりに呆気ない結末に、ウェルテは恐怖よりも情けなさを感じていた。森に入る前、盗賊に出くわしたら斬ると豪語していた、つい数時間前の自分が酷く滑稽に思えてきた。盗賊を斬るどころか、もうすぐ自分もサリエリと同じ様に、この卑怯で野蛮な、動物じみた感性しか持ち合わせていないならず者に殺されてしまうのだろう。こんなことなら、ガスコンに一緒に来てもううべきだった……眼前の敵と自分の認識の甘さを呪いつつも、ウェルテはだんだん腹の虫が收まらなくなってきた。

「昨日、森で徴税吏を殺したのはお前達だな！ こんな真似して、ただで済むと思うな盗賊ども！」

ウェルテは精一杯の怒鳴り声を張り上げる。黒い革手袋がウェルテの首を更に強く締め上げた。

「貴様、自分の立場が判つていないようだな！ そんなに死にたいか！」

背中にいる敵も感情的になつて怒鳴り返した。ウェルテの頸動脈の上をなぞつているダガーの剣先が強く押し当たられ皮がすりむけた。背中の敵は、まだ声変わりも迎えていないような澄んだ聲音の人物だった。確かにウェルテの首や肩を押さえている敵の腕は、筋骨隆

々とは言い難く、力こそあるがむしろ華奢なほうだ。そんな年端もないかない小僧に背中をとられ、これから不条理にも殺されると思うと、ウェルテは不安と悲しさ、悔しさでたまらなくなつた。

ヴァン先生、せつかく教わった剣術を使う間もありませんでした。やつぱり、人生は騎士道物語のようにはいかないようです……

ウェルテが覚悟を決めた時、後方から叫び声が聞こえた。

「お待ちくださいー！ どうか、どうか剣をお納めください！ お願ひ致します」

穀物倉の方からに初老の老人が走つてきた。継ぎ当てだらけの粗末な毛織物の衣服をまとつたその老人はウェルテの眼前で跪くと、両手を出して訴えた。

「申し訳ねえです、スタックハースト様。これはひどい手違いなんです。皆さんも、どうかこの方をお放ください」

白髪、無精ひげの小汚いこの老人は、ここバルテルミ村の村長を務めるポール・ラムジーで、ウェルテが徴税の為に村へ訪れる度に会つている顔なじみだつた。

「お願ひします。そのお役人様はこここの当番の徴税吏様で、自分が年貢のやりくりがつかない時には、いつも良くしてくれる優しいお方なんです。だからどうか、今回はお見逃しくださいませ」

老人はそう懇願した。犬を連れた男達は呆気に取られてお互いの顔を見合わせる。

「何？ 徵税吏だと？ ジャあオストリッチの……クツ」

背後から悔しそうな声が聞こえたかと思うと、首の拘束と短剣が解かれ、ウェルテは背中を強く蹴飛ばされた。前のめりに倒れたウェルテを、老人が慌てて抱き起こす。

「本当に申し訳ねえです。どうか堪忍してくださいせえ」

ウェルテは咳き込みながらも、剣を握んだまま敵へと振り返った。ウェルテは、自分を締め上げて短剣を突きつけた者を憤怒の形相で睨みつけた。

やはりウェルテが思つたとおり、敵は自分よりも背の低い細身の

男だった。声つきから判断するにまだガキに違いない。黒いシルクのクローケに黒いブーツ。口元に黒いネットカチーフを巻いて顔を隠しているが、ウェルテを睨むその右の目には、まだ若いくせに銀縁のモノクル（片眼鏡）が光っている。それ以上にウェルテの目を引いたのは、その男が目深に被る黒いファーフェルトのキャバリアーハットに映える、鮮やかな孔雀の羽飾りだった。教会の聖楽団でコーラスをやつていそうな聲音やその裕福そうな風貌を見るに、とても盜賊には見えなかつた。背丈や声から察するにまだかなり若いに違いない。

「この、クソガキめ！」

ウェルテは、頭のてっぺんから足元まで全身黒ずくめのその小男へ剣先を向けるが、ブラッドハウンドを連れた男の一人がウェルテの首に短剣を突きつけた。ラムジー老人が慌ててウェルテの腕を掴んだ。

「ああスタックハースト様、どうかお怒りをお鎮めください。すぐにご自由に致しますので、どうかご冷静に」

「これが冷静にしていられる状況か！」

敵のもう一人がウェルテへと手を伸ばす。

「武器を預かる」

首筋に剣を突きつけられているので、ウェルテはため息をついてレイピアを地面に置いた。男は素早くレイピアを拾い、ウェルテの右腰のマンゴーシュを鞘から抜き去つた。

「あとできちんとお返しいたします。だから今しばらくお待ちくださいませ」

ラムジーは何度もウェルテに頭を下げるが、黒服の小男を少し離れたところへ連れて行き、早口でなにやら説明はじめた。老人がまくしたてている間に、黒服はモノクルのレンズ越しに、疑い深そうな視線でウェルテを見つめていた。

騒ぎを聞きつけたのか、穀物倉から出てきた数人の男達がウェルテの方を眺めている。その中には、先程ウェルテが後をつけていた

床屋のアンヘルムがこの騒ぎをびっくりした様子で見つめていた。施療中だつたらしくシャツの両腕をまくつている。よく見ると、周囲には腕や頭に包帯を巻いた者も見える。どうやら、けが人が多くいるようだ。

そんななか、もやのかかつた道の奥から馬が土を蹴る音が聞こえた。栗毛の馬に乗つた男が森からあらわれ、穀物倉の前で馬から飛び降りる。細い剣を腰に吊るした皮の鎧姿のその男は、馬の手綱をそばの仲間に委ねると、息を切らしてやつてきた。

「申し上げます！ アイアン街道東方に青騎士隊が集結しつつあります……」

その男は、黒服の前に跪くと慌てて報告した。離れたウェルテが聞き取れたのは最初のそのフレーズだけだが、報告を受けた黒服とそばにいたラムジーはにわかに慌て出した。

「荷物をまとめて、大急ぎで退去するぞ！ まず歩けない者から馬車に。急げ！」

教会にいる聖歌隊の少年みたいな声で、黒服はそう叫んだ。

周囲にいた者はみな慌てつとも、急に動き出した。男の一人がホイッスルを三回鳴らした。穀物倉からは、数人のかなり重い傷を負つている者達が板に乗せられて運び出されてきた。穀物倉から出てきたその他大勢の男達は、倉から大きな木箱や布包みを抱えて外へと運び出している。中には長い剣やレイピア、弓を運び出してくる者もいる。バルテルミ村の集落に通じる道からは荷馬車が三台やつてきた。床屋のアンヘルムが介抱する中、負傷者達を馬車に乗せると、次に男達はそれらの荷物を馬車に積み込みはじめた。

「一体、この慌てようは何だ？」

ウェルテは地べたに座つたまま、この騒ぎを眺めていた。ただ、盜賊なら治安維持にあたる青騎士隊の接近に恐れをなすのは当然の事だ。ウェルテの今の状況を考えても、青騎士隊の接近は歓迎すべきことだった。

「ハトを忘れるな！ その他の持つてゆけない物は全て燃やして」

黒服がそう命じた。穀物倉の横に、いつの間に建てたのか粗末な小さい鳩舎があつた。そこから男達はいくつもの鳥籠を荷馬車にと乗せる。

この村、いつからハトの飼育なんか始めたんだ？

その様子を見ながらウェルテは思つた。ハトは貴族や聖職者、商人に人気のある高級食材だ。他所の町ではハトの肥育で成功し豊かになつた村や商人もいる。ハトの飼育に成功すればこの村はもっと豊かになるに違ないとウェルテは思つた。

八方へ指示を出していた黒服がウェルテのほうを向いた。

「その男を縛り上げる」

「おい、どうするつもりだ！」

ウェルテが抗議の声を上げるが、命令一下すぐに子分の男がウェルテを後ろ手に縛り始めた。

「この者の始末はあなたに任せます。我々はすぐに出発する

「ありがとうございます…… どうかお気をつけて」

ラムジーはそう言つて黒服に深々と頭を下げた。

「迷惑をかけて申し訳ないけど、そつちも気をつけて」

そう言つと黒服はウェルテに険しい一瞥をくれてから、穀物倉へと足早に去つていった。

ラムジーはウェルテのレイピアと短剣を抱えると、縛り上げられているウェルテへまたも頭を下げた。

「スタックハースト様、ほんと何でお詫びしたらいいのか…… これから街道までお送りいたします」

そう言つて、ウェルテは縛られたまま、村長に抱えられるようにバルテルミニ村をあとにした。

不自由な格好でラムジーと歩いていると、ウェルテはだんだん腹の底から強い怒りが湧き起つてきた。どうやら殺される心配も無くなつたので、恐怖や不安よりも、むかつ腹のほうが勝つてきたのだ。

「確かに、徵税吏だから好かれないのは判つてゐる。でも、こんな酷い目に遭わされる理由は無い！ 家令の遣いが収穫高の抜き打ち検査をしようとした時だつて、アカバス先生と一緒に知恵を絞つて力を貸したじやないか！」

怒鳴るウェルテに、老人はなんとも辛そうな顔をして下を向いた。

「あん時のことは…… 村人一同ほんとに感謝してます。一時だつて忘れねえです。今回の事は悪魔の企んだひどい運命の悪戯みたいなもんです……」

信心深い農民の発する、坊主の説教みたいな返答はウェルテの怒の炎に油を注いだだけだつた。

「何が悪魔だ！ 一体あいつらは何だ？ いつから盜賊団を村に抱え込んだ？」

村長は、盜賊団なんてとんでもないと慌てて首を振る。

「違えます、違えます！ あのお方達はそんな悪人じやありません。この私が天に誓つて約束します」

ウェルテの堪忍袋の緒も限界だつた。

「悪人じやない奴等が、通行人を襲つてこんな事をするか？ しないだろ！ それに、盜賊団じやないのに青騎士隊をあれほど恐がる理由があるか！」

「そ、それは…… い、今は言えねえ理由があつて……」

歯切れの悪い老人の言葉を遮るようにウェルテはさらに怒鳴る。

「昨日、僕の代わりに集金に訪れた役人がこの近くで殺されたんだ。サリエリつて男がバルテルミ村にも来ただろう！ それをお前達が殺したんだ！」

目に怒りの炎をたぎらせてウェルテは村長を睨みつけた。ウェルテの顔を見て村長は真つ青な顔でかぶりを振る。

「と、とんでもねえ！ そ、そんな恐ろしい事。そんなお方、知らねえです！ それに、昨日は誰もお出でじやねえ！ もし来たとしても、そんな、殺すなんて…… 自分も、あのお方達も絶対にしねえ。ほんとです！」

「村長がやらずとも、あの連中ならやりかねないだろ！　今回の辱め、決して忘れないからな！」

普段はとても温厚なウェルテが今にも食い掛かりそうな剣幕で睨んで、村長はとうとう絶句してしまった。

その後二人はしばらく黙つて森を歩きつけた。ようやく、頭に上った血も下りてきたのか、ウェルテは少し冷静さを取り戻した。ラムジーの言葉を信じるならば、昨日サリエリはバルテルミ村へは来なかつた事になる。そうなると、サリエリは、エルベ莊園からバルテルミ村へと至る道中のどこかで殺害されたのだろうか。

「あのお、スタックハースト様。そろそろ街道です。自分はここで村に戻ることにしますが……」

村長が言つので、ウェルテは縛られた後ろ手を見せた。

「……早くこの手の綱を切つてくれ」

村長はウェルテの剣を地面に置き、なぜかロープを取り出した。

「あの、スタックハースト様。大変申し訳ねえですが、お足も縛らせてもらいます」

そう言つなり、ラムジーは農夫特有の怪力でウェルテを突き飛ばした。そして、羊の毛を刈る下準備の要領で、暴れるウェルテの両足首をあつという間に縛り上げた。

「お前は、大嘘つきだ！　はじめからこういつ魂胆だつたんだな！」
つつかれた芋虫のようにジタバタ暴れるウェルテへ、ラムジーは泣きそうな顔で詫びる。

「すんません、すんません！　これが一番いい方法なんです。このお詫びはいつか必ず……」

ラムジーはそう何回も頭を下げるに森の奥へと逃げていった。

ラムジー老人が去つた後、両手両足を縛られたウェルテは、呆然と森の中に寝そべつていた。とりあえず命は助かつたようだが、まったく身動きがとれない。近くのには抜き身のレイピアとマンゴー・シューがあるので、縄を切るためそこまで転がつてみたが、どうにも、うまく柄を掴む事ができない。

ここはもうアイン街道のすぐ近くで、石畳を叩く馬の蹄の音や馬車の音も聞こえるが、何度も叫んでも、誰かが助けに来てくれる様子は無かった。森の奥からは角笛の音が何度も聞こえる。一体何が起きているのだろう。

しばらくすると、多くの馬の歩く音が森から聞こえてきた。

「誰かー、助けてくださいー！ 誰かー、助けて！」

寝転がつたままウェルテが叫ぶと、馬の足音はどんどん近づいてくる。

数頭の馬の脚と、あぶみにのつた拍車付きのブーツが視界に入つた。

「よかつた！ 助けてく……」

身を捩つてなんとか上を見上げたウェルテは言葉を詰まらせた。

その馬上の男達は、鈍く輝く胸甲に青いクローケをまとい、腰には長剣、頭には青い羽飾りの三角帽を身に着けていた。悪名高いアグレッサ青騎士隊だつた。

「た、助けてくれ！ 盗賊にやられた！ 盗賊め、バルテルミ村を乗つ取つて根城にしているようだ。急いで捕まえてくれ！」

普段は関わりたくない相手だが、今は一番頼りになりそうな連中だと思い、ウェルテは男達を見上げながら叫ぶ。

青騎士隊の騎兵達は不思議なものを見るよつた顔でウェルテを見ている。

「隊長、こちらへ！ 怪しげな男を見つけました」

「待つてよ！ 怪しくない。徵税役場のウェルテ・スタックハーストだ」

ウェルテの抗議をよそに、隊列の後ろから青いマントを羽織つた男がやってきてウェルテを見下ろした。腰には時代遅れのごついロングソードを佩き、マントの下には同じく流行遅れなブレートアーマーを着込んでいる。右顎の深い裂傷の痕を口元のヒゲで隠したその顔は、ウェルテも何度か街中で見たことがあった。

クラレンス・ガイヤール……

血も涙も無い冷血漢として知られる、青騎士隊の隊長だった。

「早く縄を解いてくれ。バルテルミ村に賊がいる」

ガイヤールは酷薄そうな灰色の目でウェルテを見下ろしながら、それには答えずに部下へと指示をとばした。

「一小隊をバルテルミ村へ回せ。怪しい者は全員捕らえる」

すると、森の奥から早足で駆けて来る蹄の音が響いてきた。

「申し上げます！ バルテルミ村の方面より大きな煙が立ち昇っています。火災が発生しているようです！」

「わかつた。我々は南、東、北の三隊に分かれてバルテルミ村へ向かう。不審な者は全て捕らえる。抵抗するならば即座に殺せ。伝令！ ノックス砦から応援を出し、西方から森を探索せろ」

伝令は了解し馬の頭を回して早足で去つてゆく。ガイヤールの横に

いた騎士が角笛を吹き、命令を伝え始めた。

再び、ガイヤールの灰色の目がウェルテへと向けられた。

「この男は城に連行し、厳しく取り調べる」

「ちょっと、ふざけるな！ こつちは被害者だぞ！」

先程と異なり、ウェルテの叫び声にはいくぶん恐怖の色が混じっていた。抗議も虚しくウェルテは、武装した歩兵一人に拘み上げられ、

街道の方へと引きずられていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596v/>

止めのファンデブ

2011年11月2日23時50分発行